幼児の教育　第113巻　第1号　平成26年1月1日発行　ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

［特集］問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
幼児期は「準備期」？

［シリーズ］子どもが育つ場所を訪ねて
仙台市 東二番丁幼稚園

［報告］
「子どもの自己肯定感」

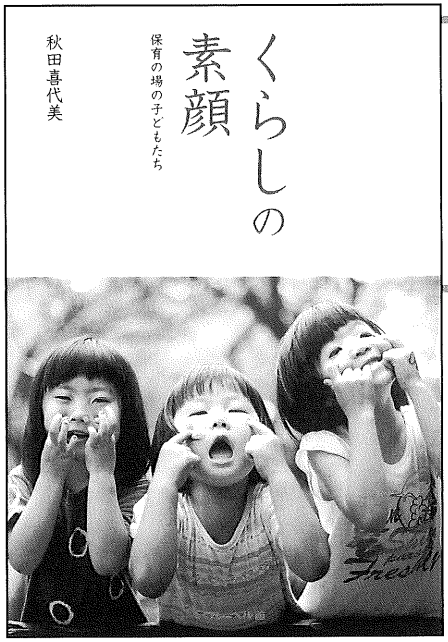
冬 2013-2014

since 1901

第113巻　第1号　日本幼稚園協会

好評発売中

くらしの素顔
保育の場の子どもたち



10931

保育実践の現場から著者が感じ考えた園のくらしについての13の思索と、園生活を描いた12冊の絵本の解説より、目の前の子どもの素顔から、園のくらしのあり方、保育の本質を問い直すことができます。

- ●著者／秋田喜代美
- ●価格／1,365円（税込）
- ●サイズ／21×15cm
- ●ページ数／152ページ

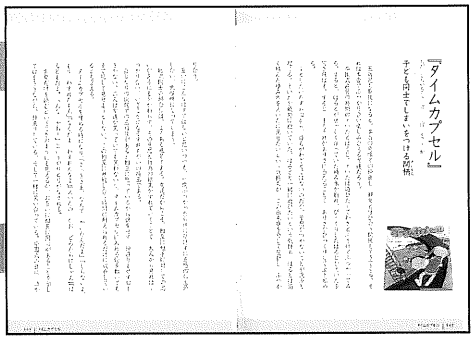
「幼児の教育」園のくらしを育む
連載第1回～13回までを収録！

ポイント1
秋田喜代美先生による新鮮な保育の視点

著者が園の生活に立会い、保育の本質を探った第一部には、日々の保育のヒントとなるエッセンスが満載です。

ポイント2
園の生活を描いた絵本の読み解きが面白い！

書き下ろしの第二部では、定番～新作まで12冊の絵本を研究者の視点で読み解きます。普段読み聞かせている絵本の奥深さに触れて、保育の幅がぐ～んと広がります！


『タイムカプセル』
子ども時代をもう一度、をつける故郷

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業推進部（03）5395-6608にお問い合わせください。

「ブロッコリー、
こんなに大きくなった」

「（さわると）何か、気持ちいい！」

子どもの情景

子ども学の源流を次世代につなぐ
幼児の教育 冬 2013-2014
第113巻 第1号

海外レポート
イタリア保育“おもいきって”参観記（5）
外国人の親を持つ子どもをめぐって　金澤妙子 ―― 48

研究
『幼稚園（をさなごのその）』の原著者ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 3
ベルタの波乱の後半生
ディーター・レドナック　・翻訳：ベルガー有希子　・解説：大戸美也子 ―― 53

報告
「子どもの自己肯定感」　安治陽子 ―― 60

アーカイブス
幼児の教育110年の散策
「幼稚園から小学校へ ― 幼稚園と小学校幼年級の真の連結 ―」
― 第23巻第4号（1923年4月）より ― ―― 66

目録
『幼児の教育』 平成25年 総目録 ―― 70

子ども学のひろば
学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ他 ―― 71

プロローグ　特集テーマ「準備期」に思う

浜口順子

備えあれば憂いなし。転ばぬ先の杖。おそらく「覆水盆に返らず、あの時ああしていれば」と悔しい思いをした人間たちが考え出した知恵なのである。

しかし、人生の先の方を見た人が後ろから来る者に「だから言ったのに」と備えなかったことを責めるとすれば、それは教育という営みの中でおかしなことになる。覆水盆に返らないように見える子どもがいるということだろうか。子どもが「覆水」状態に見える時、その教育者のほうにこそ大変な危機が訪れている。「こんなお子さんになってしまったのは……」と、家庭を非難したり、以前通っていた学校や園を責めたり、はたまた障害名のせいにしたり……。準備を怠っていたのでは？　と過去を責めるのは、教育者の責任の放棄であるし、逆に言えば、教育の一番「おいしい」ところがわかっていない。

教育における準備の目線は、いつも今から未来に向かうべきなのではないか。子どもの現在を犠牲にして未来に賭けるのではない。今の子どもが輝くことが、未来につながると信じてかかわる。どうなるかは、大人にも見えない。備えあっても憂いはある。しかし準備はやはり希望でもある。

目　次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

写真
子どもの情景 ―― 1

目次　プロローグ
特集テーマ「準備期」に思う　浜口順子 ―― 2

特集
問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 12
幼児期は「準備期」？
インタビュー　矢野智司氏　（聞き手）伊集院理子・浜口順子 ―― 4
今が、一番　松木正子 ―― 13
人生の土台　～ 六歳の春に向かって ～　向山陽子 ―― 17
「たいしたもんやなぁ」　柳瀬洋美 ―― 21

シリーズ
子どもが育つ場所を訪ねて
地域に支えられ、地域に根ざした、歴史の長い幼稚園　東二番丁幼稚園　上坂元絵里 ―― 24

実践研究
私の保育ノートから
「乗り越えよう！」その気持ちを支える　掛 志穂 ―― 30

保育エッセイ
子どもたちの「現在（いま）」を考える ④
「いま保育者である人」が「いま子どもである人」に対する不可避の「責務」とは？　本田和子 ―― 34

からだ考
食べる・つながる・育つ
食べて育つということ　― 中学校教諭の目から ―　松岡文子 ―― 38

子ども学探訪
編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック ⑧
「広がる世界、伸びる日本」というメッセージ
― 昭和8～9年の「比較」を主題にした3編 ―　浜口順子 ―― 42

特集

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと12

幼児期は「準備期」？

インタビュー

やの さとじ
矢野智司氏

京都大学大学院教授、教育人間学。人間の成長、幼児期の遊びの意味を探究。『意味が躍動する生とは何か―遊ぶ子どもの人間学』（世織書房）、『動物絵本をめぐる冒険』（勁草書房）ほか、著書多数。

今回のテーマは「幼児期は『準備期』？」です。

保育現場では、子どもが自由に遊ぶことを大切にしていますが、小学校の先生が「たくさん遊んで準備してきてください」と言うのはあまり聞きません。矢野先生は、子どもが目的性なしに無心に遊ぶことに大きな人間学的意味を感じておられ、このインタビューの始まる直前にも幼稚園の子どもたちが遊ぶのを面白そうに観察されていました。「考える」コーナーではそれぞれのお立場から、松木先生、向山先生、柳瀬先生にご寄稿いただきました。

さて、この特集「問い直そう」は最終回ですが、「あたりまえ要注意」の視点は今後も持ち続けていきたいと思います。

聞き手　伊集院理子（お茶の水女子大学附属幼稚園）
浜口順子（本誌編集委員）

幼児教育の独自性はどこにあるか

伊集院　今回のテーマの中の「?」がすごく大事だと思うんです。幼小の接続に焦点が当たるようになって、「幼児期の学校教育」と言い直したりして、現場の人間として違和感を感じているのですが……。

矢野　幼児教育に限らず、教育は何らかの準備であり、むしろ準備でないような教育はありません。しかし、次のステージへの準備が教育のすべてなのかと言われれば、そうではない。問題は、幼児教育の独自性をどう考えるかということに帰着するのではないかと思います。小学校教育に回収することができない独自性が幼児教育にあるとしたら、それは単なる準備とは言えないはずです。しかし、小学校教育との関係だけで幼児教育の独自性を考えることは、かえって幼児教育を人間の成長の全体から孤立させる恐れがあります。むしろ、人間の成長全体において、幼児教育がどのような意味や特色を持っているのかというところでとらえ直す必要があるのだと思います。

人間の全体の成長や教育を考えた時に、幼児教育はその出発点にあたりますが、単に始まりというだけではなく、一つの極限の教育の形を示しているのではないかと思うのです。

教育の二つの次元と遊び

矢野　私は、教育を二つの次元に分けて考えてきました。一つは、発達という言葉で言われてきた、社会的な有能性を高めていく次元。それからもう一つは、人間が生きていることの根源に絶えず触れていく、生命性を深めていく次元です。この生命性の次元が一番強調された教育の形として立ち現われるのが、幼児教育であると考えます。

この生命性に最も深く関与している事柄が遊びです。もちろん遊びは、生命性の次元だけではなくて、有能性を高める次元にもつながっています。むしろ、これまでの幼児教育では、遊びが結果としてもたらす発達に強調点が置かれてきました。しかしながら、

遊びを通してさまざまな有能性を高めていくという考えに一元化していくと、遊びが生み出す生命的な次元を矮小化してしまいます。遊びが手段化されてしまいます。むしろ、遊びが遊びであることの根源は、生命性とつながっていることです。

この生命性を深めることが、後の学校教育での「勉強」や「学力」につながっていきます。一見つながっているように見えないものが、つながっているということを、小学校、中学校の先生たちは忘れているのだと思います。

生命性を深めることを大切にしてきた幼児教育から小学校教育・中学校教育を見直した時に、どういったことが言えるのかということの中に、「準備」ということの新たな意味が出てくるのではないかと考えます。

生命性という考え方

伊集院　私たちも十年ほど前から、幼稚園での学びを小学校につなげていくにはどうしていけばよいのかを考えてきましたが、どうしても小学校教育のほうに飲み込まれそうになる。そうならない防波堤のような考え方だと言える「生命性」ということに矢野先生が着眼なさったのは、どうしてだったのですか？

矢野　社会学者の作田啓一先生が「溶解体験」という用語をつくられ、その言葉を初めは批判的にとらえていたのですが、生きた形でこの概念を使えるようになった時に、さまざまなものの見え方が変わってきたのです。深く遊び込んでいる時には自分と世界との境界線がなくなりますが、このような体験を溶解体験と呼びます。音楽を聴いている時、風景に見とれてしまうような時にも、このような体験が生じますが、この時、私たちは比類のない喜びを感じます。それは世界との十全なコミュニケーションが生じている瞬間です。フレーベルの言っていた「生の合一」もこの溶解体験のことだと考えると、フレーベルの教育論もすごく納得がいきます。

▲伊集院理子氏

社会的な能力を高めていくという教育の次元は当然重要ですから、この溶解体験によって実現される生命性の次元が、発達の次元とどう関係していくのか、教育学者としてそこを考えざるを得なかったわけです。

わかりにくさを学問にしていく

伊集院　子どもって、本当に日々生きているんです。それをどう学問に上げていくかというのが難しくて。

矢野　有能性の次元についての学問が発展したのは、発達の事象が観察可能で、測定可能だったからです。外から遊びを観察することによって、さまざまな有益な知見を見いだしてきたと思います。逆に、子どもが喜びに触れている溶解体験の訳のわからなさというものは、従来の学問的な用語でアプローチできるようなものと違う次元を示しています。

▲矢野智司氏

生命性の立場から幼児教育について話した時に、実感できる現場の先生とそうでない先生のわかり方が違っていて、私の仕事は、そうでない人も納得できる理論をつくることだと思っています。なぜ発達にかかわる用語群では生命的次元を説明できないのかということも含めて、生命性の次元のあり方を明らかにして、二つの次元が立体的な関係をつくることで十全な教育世界が成立しているということを明確にすることです。そうすることで、幼児教育の独自性を擁護できるのではないかと思います。

その考察の一つが、小学校、中学校のカリキュラムの中にも働いている生命的な次元を見いだして、それらが幼児の遊びと深くかかわっているということを示していくことです。

例えば、宮沢賢治の「雪渡り」を三行で要約したところで、その物語を生きることにはなりません。「キック、キック、トントン。キック、キック、トントン」というオノマトペ、あそこで物語を生きられるかどうかがかかっているのです。そういうリズム性は幼児期の言葉とつながっていて、幼児期に培

っていく身体的言語から伸びていくわけです。「キック、キック、トントン」は、身体的に跳ねる音ですよね。身体とつながった時に初めてわかるわけです。リズムを持った詩的な言葉の教育は、遊びによって育まれた身体性に基づいています。

生命性と有用性

浜口　子どもの生命性に気付けるかそうでないかは、その人の生きてきた歴史と関係がある。また、時間的にとても忙しいカリキュラムの幼稚園だと、生命的に生きている子どもの姿が気付かれにくく、生命性というのはただの概念になってしまう。変な話ですが、「生命性を大事にするとこんな良いことがある」とか言えると、もっと、子どもの生命性にみんなが目を見開こうとすると思うのですが。

矢野　生命性を深めることが、発達の基盤になります、ということは言えますが、だから生命性が重要ですと言うことはできません。

この問題は「愛」を語る時の困難さとつながっています。「愛」は有用性の次元とは全く違うのです。有用性は交換の次元で、「愛」というのは交換を超えて贈与することです。何かしてあげると何かしてもらえるのが交換ですが、「愛」は見返りなく与えることで、交換の世界を否定するものです。同様に、遊びが、有用なことに用いることのできる時間やエネルギーを惜しげもなく消費するように、生命性の次元は有能性の次元を否定します。ですから発達のために生命性が重要ですと言ってしまうと、生命性の次元は、有能性を高めるための単なる手段になってしまい、そのことで生命性は、本来の力や輝きを失ってしまいます。有用性（役に立つ）とは異なる次元を考えることができるかどうかが、経済的価値が支配的な今日の社会にとって、とても重要な課題だと思います。

生命性と時間

矢野　自由な時間の保障は、幼児教育が何であるかの大きな特徴の一つだと考えます。

幼児教育では、段ボールや積み木など、いろいろな物を用意していますが、それを使って子どもたちが何をすべきか規定していません。行為の方向付けはありますが、具体的な内容は確定していない。すると、子どもは自由な行為の中で冒険、探検ができる。冒険は未知を生み出していきますから、予想もしなかったことがそこで開かれていくわけです。学校のように狭い範囲で解答が確定する問題解決の状況ではなく、幼児教育は自由な行為を保障し、子どもに新たなものを生み出す経験、そして失敗する経験の機会を与えているのです。そういう経験を持たない子どもに、最初から学校教育みたいなものをやったら、子どもは与えられた課題に対して答える受け身的な存在でしかなくなってしまいます。放っておくのではなく、ちゃんと子どもが自己活動できる時間を保障し、子どもを冒険へと誘う魅力的な環境（メディア）を整え、自分で活動することによって自分の活動の結果を評価することができるような状況を用意することが重要です。

遊び文化の伝達

伊集院　矢野先生はこのごろ「メディア」という言い方をして、道具に注目されていて、子どもたちが自分から取り組んでみたくなるように、どう、物や道具を配置するかが大事だと書かれていますね。

矢野　僕らの世代は、幼稚園に行って初めて絵本を見て、小学校で初めてカラーテレビを見た時代に育ちました。家庭でもいろいろな電子機器に囲まれている今は、幼稚園ではテレビなんか見せないで、ほかの子どもと体を動かして遊べばいいと思います。遊ぶための道具も遊び方も「メディア（世界とかかわる時の媒介となるもの）」だと思うのです。ブランコのように、一人で取り組むことで完結してしまう道具もありますが、ボールのように、相手がいることで、よりメディアとして価値が高まる道具もあります。ブランコにはブランコによってしか開かれない、一人で楽しめるスイングとめまいの体験の世界があり、ボールにはボールによってしか開かれない、

「転がし合う」「投げ合う」「パスをする」といった、ほかの子どもたちの身体と呼応する、身体体験の世界があります。

昔だったら、子ども集団で伝えられていったのでしょうけれど、今は遊び文化が子ども同士の中で伝達されていかないので、幼稚園の先生が子どもに遊び方を伝授していくことが大切です。目の前の子どもたちに何が必要か、どういう力を身につけさせるべきなのかを配慮するとともに、どういう遊びをすると、あるいはメディアを使用すると生命性の深いところまでいけるのかを工夫することは、幼稚園の先生の課題だと思います。

浜口　三輪車とかはあまり深まりませんよね。

矢野　できることが狭いのでしょうね。

浜口　それなりに生き生きした顔になるので、一見すると生命性が発揮されているように見えるところがある。でも、「ハッ」として子どもが新しい世界に入っていくような遊びにはなりにくい。

矢野　浅い遊びと深い遊びがあると思います。それは、遊びの種類や道具の種類で最初から決まるだけではなく、導き方や子どもの数などいろいろ条件があるのだろうと思います。それでも深さや広がりをつくりにくい遊び方や道具があるのかもしれません。

伊集院　既成の物に遊ばれているという感じではない遊具を私たちは選んでいます。その先を子どもたちがつくっていく。つくり出していく主体はあくまでも子どもたちなのです。

浜口　「ダンス」もつくっていますよね。

矢野　体も道具（メディア）です。体は道具を使う道具です。最初は何か手に持って踊っていたのを、持たなくても踊れるようになるのは、体自体を道具として使うことができるようになったからです。

浜口　歌を歌うことも。

矢野　そうですね。声は身体から発せられます。歌を歌うことは、人を深い次元へと導いていきます。歌があることで、声が生命的な広がりと深さとを獲得します。声は呼吸と結び付いていますが、呼吸は人間が意識的にコントロールできる唯一の内臓の働

きとつながっており、宗教的な修行もこのことを重視してきました。子どもは歌をつくったり、ダンスをつくったりすることで、修行者のように、世界との深いつながりを味わっているのだと考えます。こういったメディアとしての歌やダンスは、幼児教育の中で育まれてきたものです。

生命性の次元を求め続ける

浜口　「準備期」に話を戻すと、意図された環境の中で、幼稚園では自由に教材を使って子どもが何かをつくるけれど、小学校は、教科書に始まって、大人によって目的が明確化された教材が多いと思います。発達段階的に教材の質が変わっていくことは致し方ないと思いますが、今の話のような広い意味で「つくる」ということを学習できれば、生命性の部分を大事にできて、幼小中高とつながっていくと思うのですが……。

▲浜口順子氏

矢野　その点については、小中高の先生も賛同してもらえると思います。でも、つくるものが直接に有用なことと結び付かなくてもいい、と言いだすと、学校の先生は納得しにくいのでしょうね。

浜口　学校は時間の制限がありますからね。

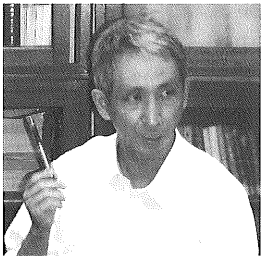
伊集院　思ったことをやっていいんだよ、という雰囲気をつくり出すと、子どもたちはどんどん力を発揮していってくれるんですが。そのあたりを学校の先生たちにわかってもらいたい。

浜口　幼稚園って、教師だけでなくいろいろな人間が入って、子どもたちは大人の魅力を浴びて生きていますよね。

矢野　自分が誰に遊び方を教えてもらったかを思い返してみると、はじまりは親や地域の人たちです。教えている側は教えているという意識はなく、まさに贈与的なものだったと思います。

『わすれられない　おくりもの』という絵本があります。アナグマさんが教えるのは、ビスケットの焼き方やネクタイの締め方など、知らなくても生きて

いけるけど、知っていると生活が豊かになるものです。キツネは自分で工夫して、もっとネクタイの締め方がうまくなる。ウサギも工夫してビスケットの焼き方がうまくなる。自分で工夫して、教えてもらったことをさらに豊かにしていく。そして、今度は、キツネが教える側になっていくのです。文化はこういうふうに世代を超えて伝達されてきたのだと思います。遊びの伝授ほど純粋贈与のわかりやすい例はないです。教える者は教えてやったと思っていないし、教わるほうも恩義なんか感じないで喜びだけがそこにあり、教えてもらった遊び方を次の人に教えます。贈与のリレーが、周囲の大人によってごく普通に行われてきた。



伊集院　仕組まれた場だと、なかなか入り込めないっていうのはありますね。

矢野　発達的な次元とは異なる生命性の次元が見えてきます。きれいに計画を立ててしまうとうまくいかないで、偶然が重なることで面白いと思う瞬間が立ち上がってくることがありますね。幼児教育の先生は、そのような瞬間をとらえるのがうまいように思います。子どもの遊びの流れのようなものを、敏感にとらえようとしているように思います。

浜口　小学校では、偶然ばっかり生かしていくと網羅せず抜け落ちてしまうでしょ、となっていく。

伊集院　そのあたりで、矢野先生は、深く生命性に触れるような体験をしていくことが準備だとおっしゃってくれているんだと思うんです。矢野先生の本の中に「生命に触れる教育は子どもの人生全体を基底で支える教育である。子どもに生命と連なる幸福で根本的な存在の感覚を与えることは、幼児教育において最も大切なことの一つだ。」という文章があったのですが、幼児にとっては、存在の感覚、存在感というものが何といっても大事ですね。学校に行っても存在感を持ち続けてほしいと、祈るような気持ちです。

（二〇一三年七月四日）

私はこう考える

幼児期は「準備期」?

今が、一番

松木正子
（大学教員）

はじめに

現在、学校教育は六・三・三・四制であり、幼稚園や保育園といった幼児期は、そのプレ時期と扱われている。この観点でのみ幼児期を述べるとしたら、「幼児教育は学校教育の準備期である」と位置付けられるだろう。だが、それはあくまでも制度上のことである。では、幼児期と学校教育とはどのようになっているのだろうか。

小一プロブレム

小学校では、「小一プロブレム」という言葉が使われている。小学校に入学してくる子どもたちが、学校教育になかなか適応できず一斉学習が成り立たない。あるいは、学校嫌い、学習困難といった問題を起こしている。このように小学校での対応がついていけないという実態から生まれた言葉である。そのための対応として、自治体によっては、一、二年生の低学年を少人数学級とし、通常四十人が定員のところを、三十人もしくは二十数人とかなり少なくして学級編成を行う配慮がされるようになっている。また、担任補助がつく学級もある。

このような実態から、小学校から幼稚園に対して、入学前にはこれだけのことをしておいてほしいとい

松木正子（まつきせいこ）
十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科教授。
元お茶の水女子大学附属小学校教諭。

う要望が出されるようになった。その結果、いつの間にか、幼稚園は学校教育の準備という意識が芽生えていったようである。

保護者からの要望も、学校教育の先取りを意識したような「指導」を求めてくる。一斉指導になった時に困らないようにしてほしい。文字が書けないと学校でついていけないのではないかと文字指導が取り入れられるようになる。計算ぐらいできなければ遅れるのではないか……。このように、保護者の不安が拍車を掛ける。

幼小連携

お茶の水女子大学は、附属の幼稚園と小学校が隣接している。もちろん学校教育と幼稚園教育とでは、「教育」と「保育」の違いがあるのだが、開発研究などをきっかけに幼小連携の共同研究をしてきた。このような研究は常になされるというわけにはいかない。そのような時にも機会をとらえて互いの指導や保育を参観するように心がけてきた。また、一年生と年長児との交流を通しても、互いの実践を学び合うようにした。

研究で大切にしたのは、小学校の準備期として幼稚園教育を位置付けることはしない。幼稚園で培った能力を受けて、小学校ではどのような入門期を用意すればよいか……。子どもたちが学校教育に適応し、その子たちのより良い学びを構築することができることを第一に考えよう、というものであった。

ではこのような視点に立った時、小学校に入ってくる子どもたちに、つけておいてほしい能力とは何だろうということになる。

・話を聞く態度が育っていること。
・自分の物の管理ができること。
　自分の物と他の物との区別ができる。
　服の着脱ができ、たたんでおける。
・食事のマナーができていること。

このように書くと、幼稚園で学ぶというよりも、生活する上で必要なことだということになろう。その通りである。小学校の教育に必要なのは、小さい

ころから習慣として持っているとよい能力なのである。このほかには、身体機能として、

・しなやかな体の動き

が挙がった。何をもって「しなやか」と考えるかというと、障害物の前で体をかわすことができる能力であり、片足や両足で跳ぶことができる能力である。つまり、自己防衛の身体能力があるかということであった。これらは、鬼ごっこや石蹴り、かくれんぼといった伝統的な遊びの中で自然と身につけてきた能力である。飛び石を一つずつ跳んでみせたり、細い塀の上を歩いてみたりしたものだが、このような体の使い方の基本は、幼児期にしておかなければならないことだろうと考えた。同じように、

・逆さ、ぶら下がり

の体験も持っておくほうがいい。

・虫捕り、おままごとなど何でもよいので、興味を持って熱中して取り組む体験を持っていること。

これは、自発性を大切にしたいという現れである。

・人とかかわることができる。

人を思いやる、人と共に仕事ができる、共にいることに喜びを感じることができる。これらは、社会生活を営む上で大切な力であろう。何でも同調しようという態度ではなく、協同する個であることが前提である。

こうして挙げていくうちに、幼児期に身につける力というのは、自転車に乗る能力のように、一度体験すると一生身についているものであることがわかる。幼児期に体験しておくこと、身につけることは、一生身についている力なのである。

「今の私が一番好きです」

悩み多き年ごろに友人から送られた一通の手紙。その末尾に「今の私が一番好きです。」と書かれていた。それまで、自分というものに対してこのような言葉で考えたこともなかった私にとって、自分をこのような観点で見ることは新鮮な驚きであった。それ以後、この一言は今に至るまで、自分を省みる大切な言葉になっている。

「今の私は一番好きと言える私なのか」。仕事を一段落させた時、旅行をしている時、ふっとゆとりの時間が持てた時など、自分に問う言葉となった。それは、自分なりに精いっぱい生きているか、生きようとしているか、心に屈折したものがないか、充実しているのか。そんな自分を振り返る貴重な言葉である。

幼児期

幼児期の子どもは常に「今の自分」が好きである。とにかく遊び、探求し、一時もとどまることを知らないように見える。喜び、怒り、悲しみ、どんなことにも興味を持って楽しむ。もちろん子どもなりに悩みや苦しみもあるだろうが、全身全霊で「今」を生きている。そのように精いっぱい生きている時には、自分を振り返る必要はない。幼児期は、今日を後悔しないようにとか、未来の自分のためになどと考えず、思いっ切り「今」を生きればいい。

鬼ごっこをして園庭をかけ回る。草原で虫捕りに夢中になる。どう育てようかと図鑑を見る。どれも楽しいから、興味があるから……と、自然に全力で取り組む。これが幼児期であろう。そこには「今」しかない。今、今を充実させることこそが幼児期のありようで、それ自体が完結した「生きること」である。それを準備ととらえるとしたら、人の一生は常に明日の「準備」である。

校歌

縁あって、講演会場がたまたま私の母校になった。六年生の二学期に転校して来てわずか半年ほどで卒業した「母校」である。だが、昔の通知表に書かれていた歌詞を見ているうちに、旋律が浮かんできて歌うことができた。何十年と忘れていた校歌である。

忘れているけれども自分を作る土台になっているたくさんの体験の一つが幼児期に行った経験である。それを準備と言うのなら一生その積み重ねであろう。「今が一番好きです」と言える一日一日を積み重ねていく、そんな幼児期を過ごしてほしい。

私はこう考える

幼児期は「準備期」?

人生の土台 ～六歳の春に向かって～

向山陽子
（前私立幼稚園園長）

毎日を、子どもたちの中で生きてきた。

幸いにも、生まれてくることを心待ちにされ、愛され、慈しまれてきた子どもたちと、保護者の理解と協力を背景に、子どもたちが遊びに遊ぶ時空を共にしてきた。

子ども一人ひとりが〝生きるに値する社会〟と思える子ども社会と、喜びを持って〝生きていく自分〟を意識できる子どもに育てることが責務とこの道を歩いてきた。

同じ想いの教師たちに支えられてきた。

はじめに

アルバムを開いた……。

・入園のころの不安げな顔

幼稚園に自分の場所ができるにつれて、表情が増えてくる。「私は楽しい」「私は泣く」「私は??と感じている」と体中が語り始め、交信し始める。砂、泥、水、葉、花、チャボやウサギ、積み木、牛乳パック、粘土など、モノや自然とかかわり、その力を通して先生と友達とつながり始める。

初めての大きな社会で、人とモノとつながろうとして立ちのぼるさまざまな感情、想い、動く体。

・年中の始めのころ

年少の終わりの誰もが居心地の良かったクラスを解体して、新しい担任、新しい部屋になったころ、

向山陽子（むかいやまようこ）
前大和郷幼稚園園長、元駒場幼稚園園長。現お茶の水女子大学非常勤講師。共著『保育者論』（同文書院）。子ども主体の保育環境、親と育つ幼稚園づくりに努めた。

〝場〟を共有して遊んでいてもそれぞれのイメージがちぐはぐなのだろう、今ひとつ顔がさえない。電車のジオラマを作りたいと言ってきたA夫の思いを、担任が積み木で形にした所へ、電車好きたちが、よりどころを求めるように集まったのだけれど……と、あの場の空気を思い出す。

◇　◇　◇

積み木に凝る子、動物に凝る子、虫博士、きれいなもの作りに夢中だった子、とにかく体を動かす子……進級時のクラス替えの後、それぞれの興味が面白いように魅かれ合っていった。だからこそか、いざこざは花盛り。教師たちは本当によく、一人ひとりの言い分を聴いていた。

年中時代は幼児教育の要とも思う。

・そして年長

年長になると、誰もが想いをしっかりと持った主人公に育ち、遊びに遊び、教師たちは子どもの中に埋没する。

遊びに遊び、心も体もフル回転。担任たちは、一人ひとりの子どもの心と体について語り合った。

◇　◇　◇

六月、隣家の白壁の金具を的に始めた泥玉合戦で泥跡を付けたわんぱくたち。謝りに来た彼らに掃除業者の作業を見届けることを課した。と、胴は作業に向けながら、頭と手足はより高く頭上の枝を的にクラス帽を投げ始めた。課されたことに向き合いながらも、コントロールを競って投げ合いたい彼らの心と体に気付かされた。

イグアナと共に来園した恐竜博士の「友達」のヘビを真剣に観察するB男のまなざしは、草むらの虫を探した年中のころからさらに探究心を増している。入園時、砂も触れなかったC貴は、運河作りの情報交換を試みて確かめる心と体に育った。

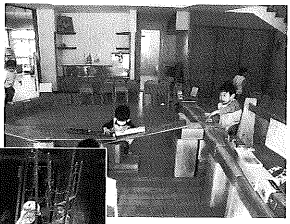
何から何まで子どもたちがつくる、年長の発表会前、人魚の役の衣装を着け、うれしげなD実とE子は、この後、一気に衣装を完成させ、その日の舞台練習で自慢げだった。

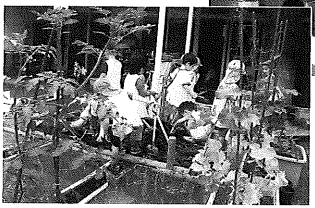
発表会で親たちから温かい声援を浴びて自信をさらに深めた彼らは、最後の行事「子どもバザール」に親たちを招き、幼稚園の生活を喜々として共に遊び、伝える。小学校入学後、友達が出来ないと泣くと母親が相談に来たF子の、友達の中で弾むような姿。あのころのF子がいる。

エピソードの数々、あの子のあの時の、悲しみ、つらさ、悔しさ、ねたましさ、うれしさ、喜びを思い出す。

その時その場を全身全霊で生きながら、自らを育て、互いを育て合っている。

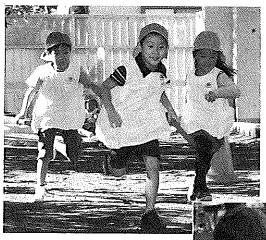
年中


▲電車ごっこ…?!


▲畑仕事→カブトムシの幼虫探し

▲指編み on 手作りマット

年長


▲クラス対抗リレー
負けないぞ！

▲“火おこし”って
不思議…

▲人魚になるの、私たち

六歳の春を迎えて

友達と、仲間と共に在る幼稚園の時空が、心と体の大半を占める。と、六歳の春を迎える。

写真の子どもたちは語っている。

幼稚園が保護者と共に、充実した子ども集団の日々の中で知情意の育ちを保証すれば、教育方法が異なる小学校でも、始めは戸惑いこそすれ、新しい社会に興味関心を寄せ、よりどころを得、自分を発

▲新しい春・カエル

▲子どもバザール準備中

揮する事柄を見つけ、新しい出会いを心待ちにして、小学校での学びを楽しみだす。環境とかかわり、遊びに遊ぶ生活の中で、子どもたちは小学校での学びの基礎となる力を培う。

・よく感じ、よく考え、よく動く心と体
・仲間と共に、不思議を探求する好奇心と姿勢
・仲間と協働しながら、自分たちの遊びや生活を、見通しを持って創り出していく力
・自分の想いを言葉で伝え、よく聴いて、学び合う力
・人・モノ・事象とのかかわりの中で、しなやかにたくましく、自己を調整する力

諸事情で育ちそびれている子がいたら、その時こそ、小学校とよく連絡を取り、その子のために連携体制で臨みたい。

最後に

初めての子ども社会でさまざまな体験をしながら、自分を信じ、新しい自分になる喜びに満ちた姿に育つ幼児期は、生涯の土台である。幼児期の育ちを培った子どもたちは、喜びを持って次のステージ、小学校へ進学する。

小学校は、送付される指導要録抄本を活用し、一人ひとりの、生まれてからの六年間の育ちを深く懐に受けとめてほしい。

幼稚園、保育所、こども園へ

男女共同参画時代、こども園時代へと時代が変わる今、この国の未来を育てる幼稚園・保育所・こども園の役割は大きくなるばかりだ。幼児期にふさわしい教育方法・教育内容への勇気ある見直しと教育力向上への努力を強く促したい。

保護者を懐に抱きながら、親として育つ喜びに共感しながら。

親御さんたちへ

急がず、焦らず、わが子が一歩一歩を、一段一段を育ちゆくさまを慈しみましょう。育つ力の芯にあなたの愛情が、ほら、見えるでしょう。

私はこう考える

幼児期は「準備期」?

「たいしたもんやなぁ」

柳瀬洋美
（大学教員）

幼きころの私は、われながら実に想像力豊かな子どもだったと思う。絵本に影響を受け、地球の裏側に行こうと庭に穴を掘り、硬い地盤に阻まれ無念の撤退をしたり、「石焼き芋」は特別な石を焼くと芋になるのだと思い込み、たき火のたびにせっせと石を仕込んだりと、日々世界の不思議に挑戦し、はたから見たら笑える幼児期を、全身全霊で満喫していた。

そんな私の途方もない思い込みや壮大な実験計画を、母は、ばかにすることも笑い飛ばすこともなく、いつも耳を傾け聴いてくれた。例えば、「ブラジルに行く！」と穴を掘っていると、母の故郷の伊勢特有のゆったりとしたなまり口調で「あんたもご苦労さんやなぁ」と私の労をねぎらい、焼き芋にならない黒焦げの石を見つめ落胆する私を「残念やったなぁ」と慰めてくれた。失敗しても成功しても、変わりなく受けとめてくれたのである。

もちろん、ここで大人の正しい知識を伝授するというかかわりもあったかもしれない。だが、母の場合、基本的には何も言わないので、私は自分でこの大いなる謎に挑むことになる。図書館に行き、幼児にとっては難しい字が詰まった本を想像力で補いながら読み、調べた。例えば穴掘りの件では、地球の内部構造を知り、庭の硬い地盤をマントルだと思い込み、そのまま掘り進めるとマグマが噴き出すので

柳瀬洋美（やなせひろみ）
東京家政学院大学准教授。臨床心理士。

掘るのをやめて正解だった、という結論に達した。そうして新しく得た知識を報告すると、母はいつも「たいしたもんやなぁ」と感心してくれた。幼い私にとって、それが何よりうれしかったのである。

今日の日本では、就学前教育は重要で、少しでも早期に始めたほうがよいという風潮が強い。中には幼児期では遅く、乳児や胎児から始めたほうがよいといった超早期教育を提唱する者もいる。超早期教育は極端にしても、実際これまでにはなかったような多彩な習い事や幼児教室がちまたにあふれている。

子ども自身の主体性が尊重されるのであれば、こうした場を利用して子どもたちが生き生きと活動を楽しむことは悪いことではなく、また、困難な課題を乗り越えた時に得られる達成感は貴重だとも思う。だが、こうした就学前教育の早期化の背景にあるのは、子どもたちの才能や可能性を少しでも早く開花させ、育てたいという親の願いだけではない。

ベネッセ次世代育成研究所が実施した調査（「第一回 幼児期から小学一年生の家庭教育調査報告書」二〇一三）によると、小学校入学に向けて気がかりなこととして、年中児の親は「友達とのかかわり」を、年長児の親は「勉強と学習」を多く挙げている。わが子が小学校での生活や学習についていけるのか、不安を抱いている親が多いのである。

実際に子育て相談の場において、わが子の意思を尊重したいとは思うが、周囲の子どもたちと同じ習い事をしないと取り残されるのではないか、と強い不安を訴える親が少なくない。わが子が将来苦労しないようにという切なる親心がそこにある。

そのため、子どもたちの将来にとって「有意義であるかどうか」が、親たちの幼児期の教育に関する重要な判断基準の一つとなっている。その結果、おのずと「できるようになる」という成果が期待され、集団であれば、他児との比較のもとでその成果は評価されがちである。一方、子どもたちは親に認められることが何よりうれしい。親の笑った顔が見たくて頑張ってしまう。親も子も一生懸命である。

だが、果たしてそれでよいのだろうか。これでは、親は理解者としてではなく、評価者としてわが子とかかわることになってしまう。子どもたちにとって本当に必要なのは、成果に左右されることなく、ありのままの自分を認めてくれる大人たちの温かなまなざしであり、さまざまな思いを分かち合い、共に育ち合っていく仲間たちの存在なのではないだろうか。

今はすっかり大きくなった息子が保育園の年中児のころ、担任の先生が笑いながらこんな話をしてくれた。息子がカタツムリの抜け殻を園庭に埋め、仲間たちと厳かに祈りをささげ、「一時間ぐらいかな」と話していたというのだ。何が一時間なのか尋ねたところ、一時間後にカタツムリが生まれ変わって出てくると答えたそうだ。おそらく、過去にカタツムリの殻を埋めた所に別のカタツムリがいたのを見て、復活したと思い込んだのだろうが、それが神聖な儀式にまで発展するとは、子どもの想像力と創造力とは実に「たいしたもの」である。後で本人にカタツムリ復活について尋ねると、彼は胸を張って答えた。「そうだよ。柄がはっきりしているのは一時間くらいで、白いの（古くて色が抜けたもの）は一晩くらいかな」。その得意げな表情が忘れられない。

私たち大人は目的地に向かう時、より早く効率的に到達することを考え、そのための計画を立て、準備しがちである。だが、子どもたちは違う。道端の花や石ころに心奪われ、ふとした物音に耳を澄ませ、目的地に向かう道中そのものを楽しむ。道は、目的地に向かうためだけに存在するのではないのである。

確かに、幼児期の豊かな経験の積み重ねの上に学童期はある。しかし、だからといって幼児期は小学校の入学準備のためだけにあるのではない。親も子も頑張り過ぎないで、幼児期の今、この瞬間のきらめきを共に楽しむことも、どうか忘れないでほしい。

▲今、この瞬間のきらめきを―仲間と共に

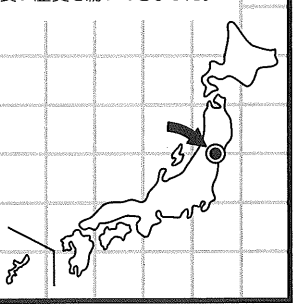
シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて

地域に支えられ、地域に根ざした、歴史の長い幼稚園

学校法人曽根学園　東二番丁幼稚園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第12回は仙台市青葉区にある学校法人曽根学園　東二番丁幼稚園です。6月に開園134周年を祝った伝統園は、地域に支えられ、長い歴史を紡いできました。



仙台駅に降り立った途端、駅のコンコースの飾りからも、七夕祭りが近いことが感じられる。町の中心地を歩いて園へと向かう。アーケード街の天井は高く、八月の華やかな七夕飾りを思い浮かべながら歩く。「そろそろ園に近づいているはず……」と辺りを見回すが、ブランドショップの看板が次々と目に飛び込んでくるばかり。けやき並木の大通りを曲がると、園長先生が、登園する親子と朝のあいさつを交わしながら、さわやかな笑顔で私たちを迎えてくださる。

幼児教育の灯を仙台にともし続ける

「子どもたちの朝は、どんなふうに始まっているのかしら」と気がはやるものの、まずは園長室で加藤正範園長、齋藤千恵子副園長からお話を伺う。

東二番丁幼稚園は、平成二十一年度までは公立幼稚園だった。平成十八年度、仙台市議会における「公立幼稚園の役目は終わった」とする廃止検討案を受け、地元商店街を中心に「東二番丁幼稚園の存続を

願う会」が設立されたという。仙台市と会が話し合いを重ねる中で、民間幼稚園として存続する方向で要望が出されたという。そこでは、

①教育課程等

「一三〇年の伝統・歴史を守り、これからも仙台市のモデル園としての役割を果たし（中略）教育方針・保育方針を継続すること。校庭、体育館、プール等の小学校施設が継続して使用できるようにすること」

②教員体制等

「教職員の質を確保すること」

③保育料

④その他

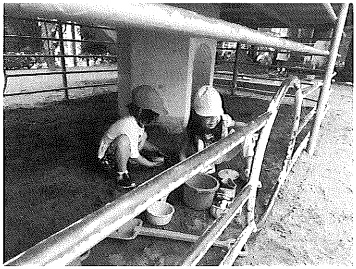
「園舎、園庭貸付や契約条件等について十分に配慮する」

等、妥協のない条件が示されている。この「存続を願う会」が民間の受け入れ先探しも担ったという。「園の名前は一三四年の間に十二回も変わってきた」という園長先生のお話を伺うにつけ、伝統と歴史は地域の厚い支えがあってこそつながってきたのだと胸が熱くなる。

しばらくすると、隣の保育室が静かになる。「園庭で遊ぶ子が多くなったんだと思います」という加藤園長の言葉を機に、遊んでいる子どもたちの様子を見せていただくことにする。

異年齢の子どもがかかわる

園庭は小学校校庭との共有になっていて、一角に、船をかたどったオリジナル遊具（昭和六十三年の幼小増改築記念）が設置されている。帆には、「東二丸　幼・小」と書かれている。校庭と地続きの一階と、はしごで登る二階部分がある。隠れ家のような空間は、大人



の目にも魅力的に映る。

一階部分の丸い出入り口から四歳児Aが三歳児Bに声を掛ける。「ねえ、Bちゃんて泣くことある？」。B児は遊び続けながら、「うん、あるよ。ぶつけた時。あと、お母さんに怒られた時」と意外に的確な答えを返す。「Bちゃんは、何歳？」「三歳」。そんな会話の後、A児はすっと中に入り、一緒に遊び始めた。かかわり始める前の手続き、やりとりがなかなかしっかりしていて、それでいてほほ笑ましい。

保育室への出入り口付近では、四歳児が、たらいや水槽を囲んでザリガニと触れ合っている。小学校のチャイムが鳴り、休み時間になった高学年の女子が数名近づいてくる。立ったまま手を後ろに組んだ姿勢で、園児がザリガニをつかもうとする様子を見下ろしている。園児がザリガニを手にすると、「持てるんだ！　すごいよねえ」と称賛の言葉を掛ける。冷めた感じで見ているのかと思いきや、素直な小学生の言葉に心が温かくなる。

こうした学年、学校種を超えた異年齢のかかわりが日常的に繰り広げられていることが、短時間の参観でも十分に伝わってきた。公立小学校と民間幼稚園になった今も、幼小の関係が変わらず続いている。

七夕飾り

「幼稚園の子どもたちが作った七夕飾りが、駅前に飾られているんです。ぜひ見て帰ってください」と齋藤先生。保育室内の壁面にも短冊飾りが飾られていた。「サッカー選手になりたい」や「野球選手になりたい」という文字が目に飛び込んでくる。地元

チームである楽天イーグルスの最近の活躍ぶりが思い起こされた。子どもたちの夢とあこがれも膨らむはずだ。「モデルになりたい」という短冊もあり、「やはり都会の幼稚園だわ」と思う。

ホールの片隅には段ボール箱が積まれていた。箱の中には丁寧に手作りされた折り鶴や巾着等の七夕飾り、飾りの材料になる裁断した千代紙などがきれいに収められていた。これだけの量を作るにはどれほどの手間と時間がかかっていることかと思う。「地域の方たちが作ってくださったものなんですよ」という齋藤先生の言葉に、地域と幼稚園のつながりの深さを改めて実感させられた。

自然を大切に

「都心にあるという立地条件で、自然に触れることが難しいので、限られたスペースを生かして、いろいろな体験ができるように努力している」と齋藤先生が話された。園庭と校庭の境界にある花壇には、芝生を植えてみたこともあるが、現在はハーブを植えたりジャガイモを栽培したりする場所に変えられたという。この日も、園長先生が収穫したてのキュウリを塩もみにして、お弁当の時間に、子どもたちに振る舞われていた。子どもたちは「園長先生は、お料理が上手なの！」と誇らしげに私たちに話してくれた。午後の時間に、「園長先生！ キュウリ、とってもおいしかった！」と声を掛ける子どもがいて、育てたものを食する喜びをしっかりと味わっていることが伝わってきた。

オアシス

子どもたちが来訪者に向けるまなざしがとても温かく、私たちの心に残った。自分の名前を自己紹介してくれたかと思うと、隣の友達を「この子は○○ちゃんです」と紹介してくれたりもする。

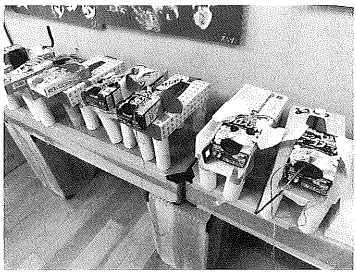
昼食を保育室で子どもたちと共に頂けることになった。子どもたちはうれしそうに準備の進め方を知らせ、自分のことを話す。さらに「○○ちゃんはもうすぐ引っ越しちゃうの」と、友達にかかわるニュースも伝えてくれた。

廊下の壁に「オアシス」の掲示が張られていた。「おはようございます」「ありがとうございます」「しつれいします」「すみません」の四つの頭文字をつなげてオアシスと書かれている。

五歳児の保育室で、ピザを作る子どもたち。薄茶色の紙で作ったピザが本物らしくできている。ピザ屋さんの看板を書いていたD児が「○○と○○は書けないから」と担任を呼ぶ。そこにE児が「うち、書けるよ」と自然に助け船を出す。

困った時、できないことがあると教師を呼ぶ。安心して頼りにする関係が基盤としてあることが伝わってきた。さらに、教師はすぐに助けてしまわずに、子ども同士のかかわりにつなげるような、ちょうどよい間をとっておられて、感心させられた。

三歳児の保育室には、空き箱で作った犬がたくさん並んでいた。五歳児が近隣のお散歩でペットショップに行ったことがきっかけで始まった犬のお散歩遊びが、三歳児に伝わって大人気になったそうだ。三歳児の靴箱に張ってある「チューリップメール」に「空き箱わんちゃん、毎日持ち運び大変だと思います。一つ



のものに愛着をもって大切にする心を育てるためにご協力ください」と書かれていた。箱で作った犬を家庭に持ち帰って遊び、また幼稚園に持ってきて遊び続ける中で育つこと、保育の中で、今、大切にしたいことを、保護者にも丁寧に伝える。幼稚園が、子どもたち、保護者、教師の間で共有したい思いが、これらの掲示から私たちにもしっかりと伝わってきた。

歴史をつなげ、子どもたちの今を大切に

仙台市立東二番丁幼稚園の創立一三〇周年記念誌「あゆみ」に、齋藤先生がお茶の水女子大学を視察し、恩物机と共に写った写真が載っている。この「恩物机」は東二番丁幼稚園で創設当時から使われていた物で、昭和初年にお茶の水女子大学に譲渡され、昭和二〇年の仙台空襲による消失を免れ、今に至っている。歴史がつながる縁をここでも改めて感じさせられた。

幼稚園要覧に「今日が楽しく明日が待ちどおしい東二幼」と書かれている。「私たちの保育は特別なことをするのではなく、あたりまえのことをし続けることを大切にしている」と園長先生は話された。「あたりまえ」の中に込められた思いを、私たちも共に大切にしていきたいと思いつつ、駅前の七夕飾りを見て帰途についた。

訪問者／上坂元絵里・灰谷知子・吉岡晶子
文／上坂元絵里（本誌編集委員）

参考文献
仙台市立東二番丁幼稚園創立一三〇周年記念誌「あゆみ」二〇〇九年

— 訪問メモ —

訪問時期：2013年7月
訪問場所：学校法人曽根学園
東二番丁幼稚園
〔住所〕仙台市青葉区一番町2-1-4
〔電話〕022-222-2337

実践研究
私の保育ノートから

「乗り越えよう！」その気持ちを支える

掛　志穂
（幼稚園教諭）

小学校教師から幼稚園教師に変わって十年目を迎えた。園児に接して特に思うのは、「体験する大切さ」である。体験の中で起こる困難に対し、何とか乗り越えようとする時、子どもたちは本当の力を発揮する。心を揺さぶられ、考え、知恵を絞りながら、成長していく。まずやってみないと、そのような成長ができない。そのやってみようとする姿にかかわり、乗り越えようとする気持ちを支えることができた時、幼稚園教師としての醍醐味を感じる。

「うわーん、Aちゃん乗りたーい！」

年中児を担任した。新入園児のA君は、毎日赤い三輪車に乗ることで、母親と離れて過ごす寂しさを紛らわしていた。

そのA君がある日、数人に、赤い三輪車から無理やり降ろされようとしていた。「どうしたの？」と聞くと、「じてんしゃ、貸してくれん……」とA君。「だって、これははじめB君が乗っとったんよ」と隣のクラスのB君たち。A君は泣きながらも、「でも、誰も乗ってなかったもん」と反撃。「少し離れとっただけよ。返してや」と周りの子たち。やっと園生活に慣れてきたA君が安定するように、教師としてB君たちとの交渉を買って出ることもできたが、しなかった。A君に、この試練を何とか自分で乗り越えて

掛 志穂（かけしほ）
広島大学附属三原幼稚園教諭。「頑張る」ではなく「顔晴る」をモットーに、笑顔で笑顔を生む先生を目指しています。

ほしかった。口を出さない代わりに、そばにいることにした。するとA君は「うわーん、Aちゃん乗りたーい！」と大泣きをして自己アピール。その勢いに、隣のクラスのC君は「じゃあ、こっちの貸してあげようか」と自分が乗っていた三輪車を指さす。それでもA君は「いやだあ、赤いのがいい！」。せっかくのC君の提案には耳も貸さない様子。A君は自分でもどうにもならなくなっているととらえ、ついに私は口を挟んだ。「ごめんねえ、C君。どうやらA君は赤いのがいいらしいわあ。言ってくれてありがとうねえ」とC君の思いを受けとめつつ、ほかの提案をした。「じゃあ、B君にあとで貸してねってお願いしてみたら？」。するとA君は泣きながら、「あとで貸してね」と言った。B君は「いいよ」と言い、赤い三輪車に乗ってどこかへ行ってしまった。A君はというと、B君がいつ貸してくれるかと目で追いながら、ずっとその場で待っていた。

しばらくすると、B君がほかの子とトラブルになり、三輪車から降りて先生たちと話をしていた。A君はそうっと赤い三輪車に近づき、さっと乗ってすごいスピードで庭の端までこいで行き、またすごいスピードで帰ってきた。なかなかやるなあと思って見ていると、A君はにこにこ顔でそれを三回も繰り返した。何ともけなげな姿である。その後A君を見ると、B君に怒られ、三輪車も取られていた。どうやら勝手に乗っていたことに気付かれたらしい。それでもA君は泣かずに満足した表情だった。

片付けて保育室に戻ってきたA君をにこにこ顔で迎えながら、「乗れてよかったねえ。今度は周りにいる子に、これ乗ってもいい？　って聞いて乗るといいよ。乗れてよかったねえ！」と優しく両手で握手をしながら喜んだ。A君が自分なりに試練を乗り越えた姿がうれしかった。

「はよ（早く）逃がさんといけんのんよ！」

年中児だった子どもたちと一緒に年長クラスに

「持ち上がった」カマキリの卵から、赤ちゃんが産まれた時のエピソードである。

「カマキリの赤ちゃん欲しい！」という友達に対し、D君が「はよ逃がさんといけんのんよ！」と、何とかあきらめさせようと必死である。なぜかというと、昨年D君自身がカマキリを飼っていて、家族中がエサにするバッタ探しに翻弄され、しかも、最後にはエサがなくて死んでしまったという悲しい経験から、必死に友達を説得していたのである。普段は自分から友達にかかわることの少ないD君。友達に自分の思いを届けて「言ってよかった」と感じるチャンスだととらえ、D君にクラス全体の場で話をしてもらった。「外だったらエサがたくさんあるけど、飼っとったらエサをいっぱい取りに行かんといけん。毎日毎日大変なんよ！」。苦労を知っているからこその説得力である。「エサがなかったら死んじゃうんよ！」。クラスの子も一生懸命聞いている。結局、子どもたちはカマキリの赤ちゃんを逃がすことにした。全体の前で話す場を持つことで、D君は少し自信を持ったようだった。

後日、園庭で、D君と友達がカマキリを見つけた。「先生、カマキリ！　あのカマキリかね」と、うれしそうな表情だった。

ウサギのナナが逃げた！

年長になったらウサギのナナの世話をすることができる。子どもたちは年長になって張り切っている。まず、飼育小屋からナナを外のサークルに移動させ、持ってきたエサを包丁で切り、飼育小屋を掃除する。掃除が済んだらエサのセットをし、ナナをまた飼育小屋に戻すのである。飼育小屋とサークルは五メートルほど離れていて、ここをナナは、ドアからドアへ移動する。当番の子が抱っこをしたり、ナナの後ろを追いかけたりして移動させるのである。子どもたちにとっての難関は、この『ナナの移動』である。移動の途中、ナナが寄り道をして、園庭の隅や飼育小屋の裏に逃げてしまうことがあるからである。

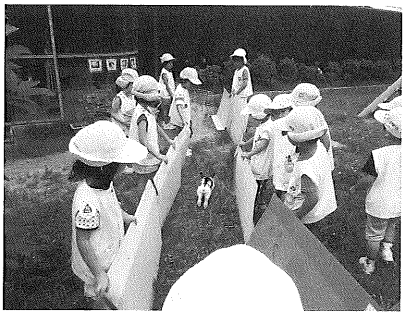
ある日、「先生、大変！　ナナが逃げた！　早く来

て！」と言うので行ってみると、当番の先生と子どもたちが困っていた。どうやってもナナは飼育小屋の裏から出てこないのである。裏には植え込みがあり、四つんばいになってやっと入れるような狭い場所である。私が入ろうと思えばできないことはなかったが、ここは子どもたちがどう考えて行動するか、待つことにした。「そうだ！　こうやって野菜を置いていったらナナが来るかも！」と飼育小屋の入り口から裏まで点々とエサを置き始めた。おびき寄せる作戦らしい。「こっちから追い出してみるけえ、あっちで待っといて。出てきたら捕まえて」と当番さん。それを見て、近くにいた子も手伝い始めた。飼育小屋の裏を右に左に行ったり来たりする子どもたち。しかし、あと少しのところでいつもナナがUターンしてしまうのである。

「ナナが出てきた時に私らが見えたらまた逃げるよ。隠れとこうや」。年長ともなると、やはり賢い。何事かと集まってきた年中や年少の子どもたちにも「静かに！　見えたらだめよ。隠れて」と指示をしている。肝心のナナはあまりに動き過ぎ、裏でバテていた（ナナはご老体なのである）。

最終的には当番の先生が四つんばいで裏に入り、ナナを確保。この後、年長児がみんなで考えて、飼育小屋とサークルの間に移動式ナナ用通路を作った。ナナがその通路を通り無事移動できた時、子どもたちは飛び上がって喜んだ。苦労を体験したからこそ、みんなで知恵を出し合い、より良いものが生まれたのである。

たくましく成長する姿に出会えることに感謝している。子どもの気持ちを感じ取れる教師になれるよう、これからも日々学び続けていきたい。



▲移動式ナナ用通路

保育エッセイ

子どもたちの「現（いま）在」を考える④

「いま保育者である人」が「いま子どもである人」に対する不可避の「責務」とは？

本田和子
（児童学者）

「いま大人である人」の責任

「いま大人である人」は、「いま子どもである人」に対して、避けることのできない責任を負うている。彼らが人として成長するために、ふさわしい環境を整え、必要な人やものを用意し、彼らが喜ぶこと・望むことをかなえるべく、あらゆる支援を惜しんではならないのである。

なぜなら、その理由は簡単である。「いま大人である人たち」が、「いま子どもである人たち」を産出し、それに「次の世代」という名前を与えて、未来を担わせる役割を与えてしまったからである。個々人が「わが子」という名の「幼い者」を産出するか否かは問題ではない。私たちが、他の生物と異なり、「社会」とか「国家」というものをつくり出し、そのアイデンティティーの確立のために「伝統」などいうものを考え出してしまった以上

本田和子（ほんだまさこ）
児童学者。お茶の水女子大学元学長、名誉教授。
『異文化としての子ども』『子ども100年のエポック』
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

は、それを継ぐものが必要となる。「次の世代」は、子の親たるか否かを越えて、すべての人に必要となったのである。

生物は、一般に、「自己複製系」であるとされている。しかも、ゲノムという点で見る限りは、生物は、常に唯一無二の個を産み出す「自己創出系」であると言わねばならない。ゲノムは極めて利己的であって、自己の遺伝情報の保持継承には熱心であるが、種族の保存などには興味がないと言われる。雄のライオンは、自身の子孫の保存のためには、他の雄の精子による子ライオンなど食い殺してしまうとされているが、この現象など、その端的な証しと言えよう。

しかし、人間は、これら他の生物との間に一線を画した。「家族」「社会」などいう集団を定立し、さらには、「国家」などいう、より大きな人為的な装置をも必要とするかに定立してしまった。おそらくは、人の知力と技術力が産み出した「文化なるもの」が、人が単一の個人として生きることを不可能にしてしまったのでもあろうか。

従って、私たちが保持し伝達しようとするのは、「個の遺伝情報」だけでなく、「種にかかわるそれ」、より狭義に現実的に言うなら、「民族の遺伝」、取りあえずは「日本人のそれ」と言えるかもしれない。「取りあえず」と条件を付けたのは、国家や民族の概念もいずれ変わることもあろうし、その場合は、より広やかなまとまりで「次世代に託すべきもの」が考えられるかもしれないからである。

いずれにせよ、私たちは「子ども」をつくり出し、それを「次の世代」と位置付けている。となれば、私たちは、彼らの存在意義と彼らの価値を改めて認識し、彼らが人として

成長するための制度やそれを支える財政に関して、さらには必要とされる労力に関しても、彼らに寄り添ったあらゆる支援を惜しんではなるまい。

「いま保育者である人」の責務

「産み育てる」責任は、すべての大人が分け持つものだとして、具体的に己の身体を駆使してその営みに従事するのは「いま保育者である人」の責務であろう。とりわけ、幼稚園・保育所、あるいはこども園など、「プロの保育者」と呼ばれる人の役割は大きい。

社会文化の急激な変貌を受けて、子どもの生育環境も時々刻々変化し続けている。彼らの成長の場も、そこに提供される人やものも、先述のように変化し続けていくことは言を俟(ま)たない。しかし、これら成長要因の変化にもかかわらず、幼児の世界には、そして幼児保育の現場には、「変わり得べくもないもの」が存在している。例えば、一人ひとりの「多様な現在(いま)」に即応すること、身体の動き・表情・言葉など「あらゆる表現媒体」を通して彼らが発信するものを受け入れること、さらには、子ども相互、あるいは子どもと大人の間に結ばれる「多様な仲間づくり」に留意することなど、保育の世界が大切にしてきた原則は変わりようがないはずであろう。

ただ、これら「変わり得べくもない原則」とともに、変わり続ける社会文化の多様性に対応して、従来に増して強調されねばならないものが出現することも確かである。その一つとして挙げられるのが、「多様性と変化」に即応し、保育現場に発生する「多様性と変化」の中で子どもたちとそれを分かち合うことではないか。

幼い人たちの日常は、突発事に災いされることのない穏やかなものであることが望まれるが、ただし、それは、「多様性」と「異質性」を包み込んだ穏やかさであるべきであろう。現に、いま子どもたちは、異文化に育ったがゆえに、言葉も振る舞いようも異にし、価値観も異なる人々との共生を余儀なくされたり、障害を持つゆえに、発達の度合いも行動様式もさまざまな仲間たちと、共に暮らすことをあたりまえとされている。多少の波風は立つかもしれないが、究極的には平穏な日々……。多様性も異質性も、幼い子どもにとってはあたりまえの日常に過ぎないのかもしれない。何しろ、日々、新しい事態に遭遇し、新しくなった自分を引き受けねばならない彼らにとって、異質の他者との共生など、取り立てて問題視することではないと言うべきだろうか。

国と国との距離は短縮の一途をたどり、国境線も日増しに薄くなりつつある今日、幼児期のこの特性、すなわち、多様性に富み、異質のものをこだわりなく受け入れるこの特性は、将来を見据えても特記さるべき重要事と言うべきではないか。そして、近代化の効率主義と相まって、とかく一律・画一的に運営されてきた学校教育の中で、幼児保育の持つこの特性は、他に一歩を先んじた誇るに値するものと自負さるべきであろう。激変する環境下にあって、「変わり得ぬもの」として保持されるべき具体的特性中の「変化」要因は、この時、日々変化し続ける社会文化の動向と、鮮やかに重なり合うのである。

—終わり—

からだ考

食べる
つながる
育つ

食べて育つということ
―中学校教諭の目から―

松岡文子
（中学校教諭）

人が生きていく上で、食べることは切り離せない行為であるのはもちろんのこと、食べるということを通して、人は何と多くの思い出、思いを持つのでしょうか。教育者の端くれとして、食が人を育むという大事な役割を担っていることを伝えていきたいと思っています。

私は中学校で家庭科を教え、担任を持ち、家庭を持つ母親でもあります。授業では栄養素のことに力を入れて教えています。自給率や遺伝子組み換え食品のことにも触れて、人が抱える食についての問題提起もしています。また、家族にはバランスのいい食事を取るように口うるさく言います。でも本当は、食事を通して癒やされてほしいと思うし、誰かと一緒にご飯を食べて気持ちをつなげることができれば、そっちのほうがよほど大事なことと思っています。何に力を入れて食を構築すべきなのかは人それぞれですが、食を通して人は気持ちを伝えることができるし、それで救われることがあるのは確かです。

個人的な話で恐縮ですが、忘れられない食事があります。結婚して間もなく、夫の実家で

松岡文子（まつおかあやこ）
公立中学校家庭科教諭。

不幸があり、慣れない環境で家族としての務めを果たさなければならず、若い私にはつらいことがありました。自宅に帰る途中、私の実家に寄りました。当時、両親は印刷業を営んでいましたが、小さな工場の二階に、私の大好物のとんかつ定食が用意されていました。針のむしろで食事がのどを通らなかっただろうと、母が店屋物を用意しておいてくれたのです。涙があふれてきて食べにくかったけれど、最高においしいとんかつでした。

もう一つ、忘れられない食事のエピソードがあります。長男が小学校四年生ぐらいの時、珍しく風邪でダウンした私に、コンビニの鍋焼きうどんを作ってくれたことがあります。風邪ならおうどんがいいよね、と自分でメニューを考え、買い出しに行き、コンロで煮るだけですが、とてもうれしかったのを覚えています。おつゆをこぼさないように一生懸命運んでくれた姿が今でも目に焼き付いています。人を思える優しい人になってくれたことが何よりうれしかったのだと思います。

今までいろいろなごちそうを食べたはずだけど、食事の思い出となると、この二つの食事が思い出されます。私と食は、「誰かを思う気持ち」でつながっているのでしょう。

リリーフランキーさんの『東京タワー ―オカンとボクと、時々、オトン―』には、お料理上手なお母さんが登場します。その中の「口と金では伝わらない大きなものがある。時間と手足でしか伝えられない大切なことがある。」との一文が心に残っています。幼いリリーさんに最高のぬか漬けを食べさせたくて、朝ごはんで取り出す時の時間を逆算して漬け込んだとか。複雑な家庭環境でリリーさんは育っていますが、お母さんの愛がリリーさんには確かに届いたのでしょう。晩年はリリーさんの傍らで過ごすことができ、お幸せだったと思います。

誰かを思って食事を用意すること、その行為の何と美しいことでしょうか。手作りでなくても、買ったものでも、誰かを喜ばそうと思って用意するもの、そこに愛が乗せられて、やっぱりいとおしい食事になるのでしょう。すべての子どもたちが、日々の食事から愛を受け取って大きくなり、また後に食事を作る人になって誰かを支える側になってほしいと願わずにはいられません。

さて、そんなふうに食事をとらえている私の給食指導の奮闘ぶりをお知らせします。わが中学校では「残菜ゼロ」を目指して食缶を空にすることが食育の大きなテーマとなっており、担任を持つ者の悩みの種でもありますが、今のところうまく回っていて、子どもたちに感謝の日々です。「ちいさい・おおきい・よわい・つよい」。子育て時代にお念仏のように唱え、私を支えてくれた、小児科医の毛利子来先生の言葉ですが、学級経営においても通じるものがあります。思春期のころは「ちいさい・おおきい・よわい・つよい」がそのまま自分の、あるいは他人の価値だと勘違いをしてしまいがちです。そこを是正することが大人の役目と、大切なことはその人なりに努力すること、みんなのために協力することだと繰り返し伝えています。

たくさん食べる、少ししか食べない、野菜が嫌い、野菜が好き。さまざまな個性のある子どもたちが同じ量を同じ時間で食べるように指導するのには無理があります。一通り配った後、「調整」の時間を設け、苦手なものを減らしてもよい、ということにしています。

「でもね、時間までにみんなで残菜をゼロにしなきゃいけないんだよ、どうする～?」との

私の投げかけに、さまざまなアイデアが飛び出してきました。

給食ボランティア制度（給食当番ではないけれど手伝ってくれる人）、班ごとに準備ができたら座って手を挙げ、その班から順番におかわりができる制度、など生徒たちの意見を取り入れているうちにスムーズに回りだしました。おかわりとはいえ、最初の班は好きなものを好きなだけ取れますから、食の細い生徒はホンの少しでいいのです。ラストになった班は、自分たちで食べ切れないものは食缶を持って売り歩きます。最近はＭＶＳ（Most Valuable Student）制度もできて、生徒たちは夢中になっています。一日のうちで授業態度が立派だったとか、班のみんなが認める働きをした人が選ばれ、各班のおかわりの前に、ＭＶＳの人たちが「好きなものを好きなだけ」おかわりしてよいのです。

生徒たちは自分が苦手な「しいたけ」なり「プラム」なりを率先して食べることができる生徒を素直に尊敬し、野菜が嫌いなある生徒は「でもこれはたくさん食べるから！」と白いご飯だけをてんこ盛りにして食べています。あら、栄養バランスは？……ご心配なく。一応すべてのものを必ず少しは食べるように指導しています。ただ、無理強いはしていません。個性の違いを認め合い、すべての生徒が居心地よく過ごせる時間にしたいと思うからです。

生徒たちは毎日さまざまなことに出会って悩み、怒り、笑い、時に怒られて過ごしていますが、同じものをみんなで頂く十五分の給食時間で何かを感じて、誰かを思う食へとつながってくれればいいなと願いながら、今日も、「ほら～さっさと食べなきゃ！　あと五分で給食終了だよ！　今日は昼清掃なんだからね!!」と大声を上げる私です。

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック
⑧

「広がる世界、伸びる日本」というメッセージ
―昭和八～九年の「比較」を主題にした三編―

浜口順子
（大学教員）

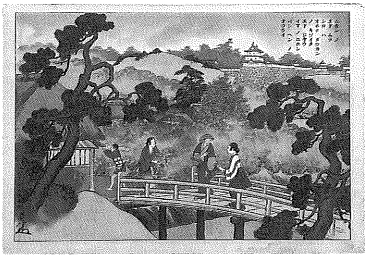
キンダーブックは、大正十五年の幼稚園令により、保育項目（遊戯・唱歌・談話・手技）に「観察」が付け加えられたことを受けて、「観察絵本」として創刊された、教育を明らかに目的とした最初の絵本である。「理知と芸術の交響楽」というモットーのもと、一流作家の絵や文章を採用し、専門家の指導・監修のもとに編集された。

この連載ではこれまで創刊初期（昭和二～六年）のもの、しかも復刻版の中に収められていない号を中心に紹介してきた。昭和十年代に入ると、特集テーマによっては軍国主義的な色彩がいっそう顕著になってくるが、今回はその入り口付近で、「比較する」という手法を使っているものを幾つか見てみたい。というのは、戦前のキンダーブック全一八九編のうち、比較を主題としたものは六編あり（「塩と砂糖」「今と昔」「暑い国と寒い国」「どっちが速い」「世界一」「大きい船小さい船」）、そのうち四編が昭和八～九年に集中していることに興味をひかれたからだ（右の六編のうち、昭和六年の「塩と砂糖」は今年の春号で紹介したが、比較というよりむしろ、もともと対照的なものとして幼児にも認知されているものを並列させ、

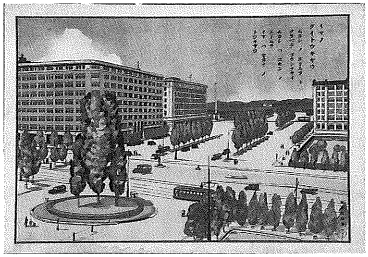
浜口順子（はまぐちじゅんこ）
お茶の水女子大学大学院教授。

改めて深く見直すような内容だった）。

今回取り上げる「比較もの」は、引き比べることによって、日本の素晴らしさ、日本が世界でどのような位置にあるか、いかに発展してきたのか、を知らせようとするメッセージが強く感じられる。



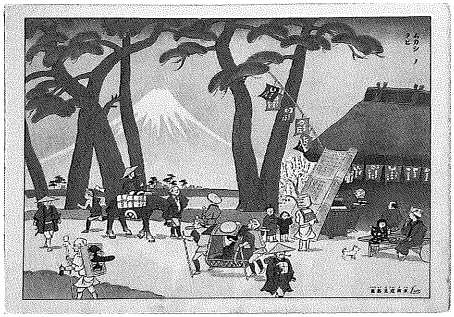
▲画像１　昔の江戸村



▲画像２　今の大東京

「イマト ムカシ」（第五輯第十二編　一九三三（昭和八）年三月）

比べられている対象は、「江戸と東京」「旅行」「船」「通信」「乗り物」「雪国の交通」「幼稚園」「寺子屋と小学校」「おうち」「灯り」「火消しと消防」「衣服」である。表紙をめくると、まず、遠く江戸城を望む日本橋辺りの風情（**画像１**）と「今の大東京」（**画像２**）とが左右ページに繰り広げられる。その次は、広重の絵のような「昔の旅」（**画像３**）。背景の富士山、駕籠（かご）かき、虚無僧（それを指さす子ども）、茶屋で休む者、馬上でキセルをくゆらす旅人など、細かい描き込みが面白い（本田庄太郎画）。これに対して「今の旅行」（**画像４**）は、ボーイさんが給仕するような、現代でもぜいたくな食堂車。日本髪の母親が、



▲画像３　昔の旅

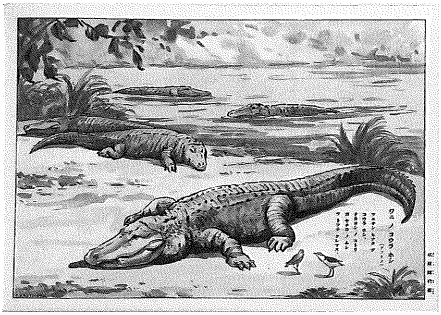
▲画像４　今の旅行

▲画像５　昔の幼稚園・今の幼稚園

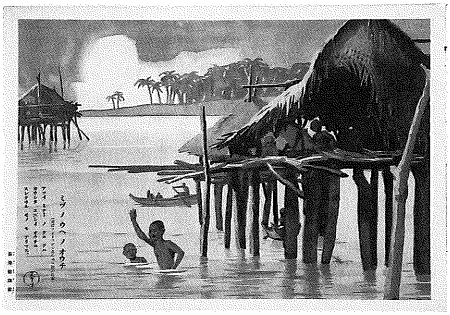
子どもたちとフルコースの西洋料理を食している。幼稚園の今と昔（**画像５**）というと、服装の違いはもちろんだが、遊び方が相当違う。「昔」は、先生に合わせて歌を歌うか遊戯をするなどしている。「今」は、机の上に置かれた空き箱や色紙の切れ端などの材料を使って、それぞれの子どもが、思い思いの人形のおうち（のようなもの）を作っている。模倣的で子どもらしい動きの乏しいお遊戯が批判されていた時代の「今」、子どもがそれぞれの工夫をしながら製作する「手技」がよしとされ、それを補助しつつ見守る保育者の関係図が見て取れる。窓の外には、園庭で何人かの子どもが一緒にヒル積み木で一つのものを協同して作る様子が垣間見え、当時最先端とされていた保育方法が具体的に示されている。

「アツイクニトサムイクニ」（第六輯第四編　一九三三年七月）

前半は、アフリカや「南洋フィリピン島」、インドなどの暑い地域（**画像６、７**）の、後半では氷に閉ざされた北アメリカや南極・北極

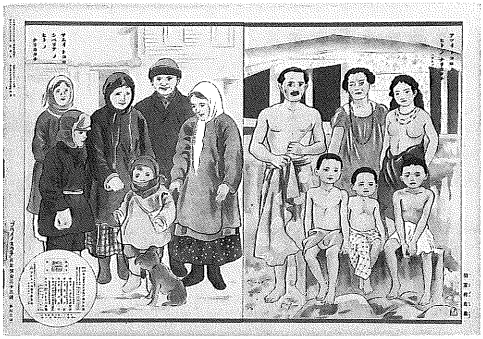


▲画像６　ワニの甲羅干し（アフリカ）



▲画像７　水上のおうち（フィリピンのモロ族）

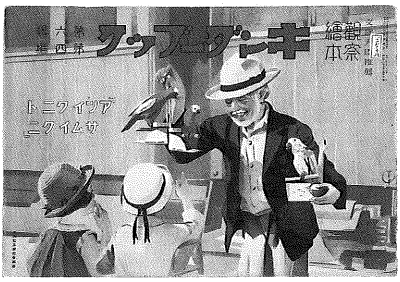
▲画像８　氷の上で魚釣り（北アメリカ）



▲画像９　シベリアの家族・サモア島の家族

など（画像８）の動物や人々について、紹介されている。最後のページには、暑い国と寒い国の、各六人の家族が並んでいて、服装がずいぶん違うことが比較できる（画像９）。原文では、それぞれの「ヒトノナリカタチ」と書かれている。

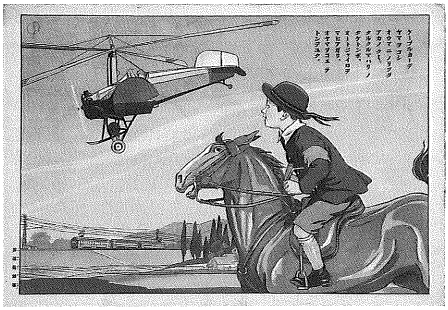
どういう意図の絵なのかわかりにくいのは、表紙（画像10）である。これから背景の電車に乗るところなのだろう、日本人らしき二人の小ぎれいな服装の男の子と女の子が、西洋人らしき優しそうなおじいさんに色鮮やかなオウムを見せてもらっている。この二人は、「南洋の駅の売り子さん」のページにも登場するのだが、また別の白人らしき背の高い紳士を頼るようにして立ち、現地の売り子を見下ろしている。あたかも、暑い国・寒い国は、自然は豊かだが人間生活の程度は低いと考え、それを西洋人と日本の子どもが見物しているように見えてしまう。



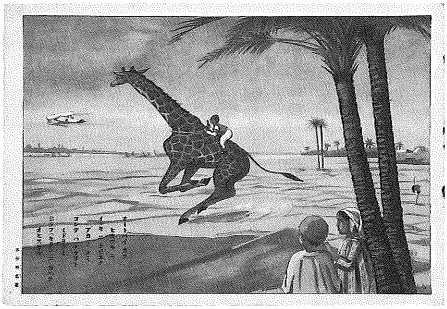
▲画像10　オウム売りのおじいさん（表紙）

「ドッチ ガ ハヤイ」（第六輯第十一編 一九三四（昭和九）年二月）

これは、二つのチームに分かれて、子どもたちが乗り物を次々に乗り換え、世界を股にかけたバトンリレー競争をする、何ともスケール



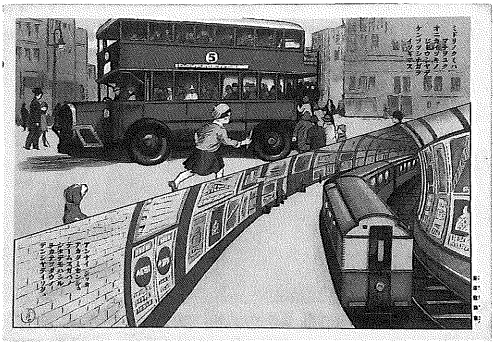
▲画像11　馬とオートジャイロ



▲画像12　ジラフ（キリン）と飛行機

の大きな一冊である。しかし、キンダーブックは、全ページをいろいろの画家たちに描き分けてもらう作り方をしているので、このような一貫した内容のものを作者たちに振り分けるのはさぞ大変だっただろうと想像する。おそらくそのためか、読んでいて、リレーレースのつながりが見えにくいところがある。大変な遅れをとっていたはずのチームが、次のページでは追いついてしまったりしているので、「どっちが速いか!?」と推理したりわくわくしたりするには、ちょっと物足りないものになってしまっている。

そのような欠陥はありつつも、なかなか楽しめる。多分、スタートは日本、そこから中国、南洋の島、アフリカ、フランス、イギリス、ロシア、満州、ゴールは「新京西公園、ゴールめがけてひた走り、どっちが速いかひた走り」で終わる。勝ち負けは、読者にはわからないのである。牛、馬（**画像11**）、ダチョウ、キリン（**画像12**）、ゾウなどの動物や、人力車、帆掛け船、オートバイ、軍艦、飛行機、二階付バス、地下鉄（**画像13**）、駕籠、汽車、トロイカなど、実にいろいろな乗り物も登場する。



▲画像13　二階付自動車・地下鉄道の電車

子どもの気持ちになってみると、ページごとに繰り広げられるレースが一つのリレーにつながっていることはわかりにくいと思う。乗り物も、乗り手も変わっていくし、カギとなる赤色と緑色の腕章とバトンは見づらいページもあるからだ。それぞれの乗り物の速さを推理する材料もないし……とすると、このキンダーブックが残したメッセージは何だろう。「速いことはいいことだ」ということだろうか。世界をバトンでつなげば一つになる……というような「絆」的価値観は、この時代にあったとは想像し難い。昭和初期は、大人たちがこぞって、世界一周する時間を競い合っていた時代なのである（第四回参照）。

比較の先にあるもの

「比べてみよう」というテーマ設定は、観察して客観的に判断のできる目を育てる手だてのようでありながら、なかなかそう単純なものではなさそうだ。「どっちが速い」のように、比較対象に最低限必要な情報が不足していると、ただ与えられたゲームを受け身で見守ることに終始してしまう。特に難しいのは、社会的なテーマを比較する場合だ。暑い国と寒い国の比較は、温度による生活の違いを越えて、その時代の世界観を映し出していた。また「今と昔」の比較では、昔より今のほうが進んでいるという安易な価値観に直結しかねない。世界への拡大、技術の進歩へと邁進しそれを喧伝していた当時の社会では、大人たちのそういうムードを子どもは胸いっぱい吸い込んで、未来を大きなもの、挑戦しがいのあるものと感じていたことだろう。果たして現代の子どもは、どうなのだろうか。

―続く―（引用は、現代文字・仮名遣い等に変えてあります。）

海外レポート

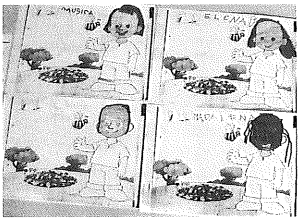
イタリア保育 おもいきって参観記(5)

外国人の親を持つ子どもをめぐって

金澤妙子
（大学教員）

勤務先の海外長期研修制度で、私はイタリア・エミリアロマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけであった。

最終回の今号では、両親またはそのどちらかが外国から来ているという家庭で育つ子どもの姿と、そうした子どもを抱える保育の様子を紹介する。



▲塗り絵なのにみんな違って……

移民の問題と保育～プロジェットの背景

当地には日本の公立園のような異動はないが、実際は、年度が替わると人も少し代わる。実習生が入る関係で、私もリミニ市滞在後半、新年度を機に観察する園を替わった。後半通った保育園は、一歳児クラスと二歳児クラスのみ。他の園の保育時間は十六時までで、昼食以降も残るかを親が選択するが、この園では子どもは皆、帰宅する。十二時半には続々とお迎えの保護者がやって来る。ニードパート[注]タイムと呼ばれるタイプの園で、遅くとも十三時半には子どもは誰もいなくなる。保育者の勤務も、遅くま

金澤妙子（かなざわたえこ）
大東文化大学文学部教育学科准教授。

で残ると決められた日以外は十四時まで。「食事があるので半分とまではいかないが、保育料がその分安い点はママたちもいいのよ」と保育者は言う。私が前半通った保育園から移ってきた保育者が、前の園と違い、ここは家にいる母親が多いと教えてくれた。

人口十四万ほどの市の中心地からバスで約二十分離れると、市内の最も北の外れ。家賃も安くなるからだろう、この園は外国人労働者が多く住む地域にあった。褐色の肌の保護者はアフリカやアラブ系、白人ではロシアやウクライナ、アルバニアなどで、イタリア語をあまり上手に話さない保護者もいた。この園の今年度のプロジェットは、「異文化理解・交流」に決まった。一、二歳児だけなので難しいと思い、問うと、「これは私たち大人側の課題だ」と言う。九月半ばに開園し、インセリメント（適応見合わせ期間）で両親と子どもの面談が始まってみると、両親かそのどちらかが外国人という家庭の子どもが、思っていた以上に多かった。保育者側も動揺したが、イタリア人家庭の親からも、「大丈夫か、本当にこれでやっていけるのか」と不安の声が上がったそうだ。外国人家庭の子どもを、市内の各園にもう少し均等に配分して、集中を避けるような配慮を役所はしないのかと聞く私に、コーディナトリーチェ（本連載(1)参照）は言う。「親は住まいに近い所に子どもを入れたがる。役所としては、そこに家があり、園にポストがあれば受け入れる。外国から来た人の子どもが多くなるから、少し遠いけれど向こうの園に行ってくれとは言わないし、言えない」。うかつな質問だったと反省するほど、もっともなことだった。

「以前、アルバニアから来た子どもがいた。アルバニアは独裁者による支配が続いた国。父親は、アルバニア式に育てたいので家では厳しく対応しているから、園でも抱きしめたりしないでほしいという希望であった。そうは言っても、子どもは十八か月かそこら。本人にはイタリアだのアルバニアだの関係ない。思わず抱きしめたい時にもそれができなくて、ジレンマを感じたこともある」と、ある保育者。

具体的な保育の手だてとしては、このプロジェッ

トのもと、子どもに読み聞かせる絵本を、異質なものの交流という視点で選んでいた。「イタリア人は開放的なイメージがあるかもしれないが、イタリア以外の国の人に対して、案外保守的で閉じてしまう。あとは、各自の国の料理を持ち寄るようなことから始めて、理解を深めていければ」と話す。本連載(2)でイタリアの幼稚園・保育園には、クリスマスと年度末（六月）に大きな集い（フェスタ）があると書いた。この園では独自に、保育者と父母の会で貧困者への支援に取り組んでいて、年間五回開催するフェスタではさまざまな手作りの物を売り、売上金を寄付する。お国料理の持ち寄りは、この園らしいアイデアである。

塗り絵なのにみんな違う

月平均二回、この園のみは丸一年かけて観察に通ったベネト州パドヴァ市の公立幼稚園（前号で紹介）は、黒人が多い印象を受けた。知人（通訳）が、両親がイタリア人という子どもの割合を聞いたところ、保育者はあまり言いたくなさそうに、60％くらいと答えたそうだ。しかし知人は、白人でパッと見ただけではわかりにくい外国人を含めると、半々くらいではないかと言う。希望の園に入園可能でも、あまり外国人が多いと親のほうが敬遠して、第二、第三希望のほうに回ることもあるそうだ。園児を持つ母親ならではの貴重かつ興味深い話だったが、保育者は、もちろん分け隔てなく接していた。前回研修時、ボローニャ市でも、園内の外国人の子どもの説明の際、「日本では考えられないかもしれないけれど、私たちは役所が受け入れれば、どの国の子どもも受け入れるわ」という保育者の言葉に、誇りとこの国における移民差別の問題を感じたことを思い出した。

観察初日、五歳児は午前中、初めて小学校へ出かけ、午後の保育では、そこで見たこと感じたことを話し合って絵に描いていた。パドヴァ市の公立幼稚園では、週二回英語の教師が来園する。この日はその日で、三、四歳児が午睡をしている間、こうして五歳児だけの活動をしながら、六～七人ずつのグループで英語の授業を受ける。五種類の色の名前と使

い方（形容詞＋名詞／イタリア語と逆）を学んだ後、坊主頭の子どもが描いてある紙が配られ、学んだ色で塗る。黒人の女児は肌を茶色で塗り、頭に（自分の）三つ編みを描き足した。白人の子どもは肌をピンク、髪を黄色や茶色で塗っていた**（冒頭写真）**。私が「肌って肌色じゃないのね」とつぶやくと、知人は、わが子（イタリア人とのハーフ）が、「『ママ、顔はピンクよ』と言うのがよくわかった」と言う。

帰りの会でも小学校でのことが話題になった。ある黒人の女児が「私みたいに肌の茶色の子がいたわ」と言うと、「私も初めて小学校に行く時、不安だったけれど、行ってみたら楽しかったわ」と保育者。子どもにすれば、思い出したことをパッと口にしただけかもしれない。だが私には、普段は肌や髪の色などに関係なく入り交じって無邪気に過ごしていても、就学の近づいたこの時期、小学校という新しい世界の入り口で、自分と同じ外見の子どもに着目し、心に刻んで帰ったようにも思え、この子なりの安堵の思いを垣間見た気がした。

▲塗り絵の下絵

率直な反応、工夫の価値

リミニ市で滞在前半に通った保育園の女児ソフィ（15-20か月クラス）は、保育者がしてほしくないことを意欲的にする子どもだった。たたく、つねる、かむ、が言葉でもある年齢だが、いろんな子どもの泣き声のもとは彼女ということがよくあった。室内用の大きな動物シーソーを一人で窓際に押して行き、それを台にして身を乗り出して外を見ようとする。玄関脇にある遊具庫の扉のノブを、精いっぱいのつま先立ちで何とか開けて、外で使用する三輪車をホールに持ち出して乗ろうとする。この園全体のプロジェットは「自主性」だった。彼女のこういう行為をその芽生えと考えたい私とは異なり、保育者は、それは自主性ではないと言う。「ソフィの両親はマケドニア人で、イタリア語がほとんどわからない。親戚も含めた一族で移住し、年の離れたいとこたちも近くに住んでいて、ソフィはよく遊んでもらってい

る。中学生のいとこたちには玩具のように扱われることもあり、園でそれをまねるが、他児に危険なこともある。私たちがダメよと言っていることもわかっていない可能性もある。でも、言葉はわからなくても、禁止や容認されていないことはわかるのではないか。ずる賢いところもあると思う。イタリア語の理解の問題もあるので、何度も繰り返して伝えていくしかない」と話す。親子だけでの移住は、一族での場合と違い、周囲に頼る人がいないことも多く、保育者は親の不安にも気を配っていた。

リミニ市で滞在後半に通った幼稚園にも、両親またはそのどちらかが外国から来ているという子どもは何名もいたが、全園児百名の中で黒人は四歳児クラスの女児一人だけだった。その子の少し突き出た感じの下唇を、戯れなのかめくるようにして裏側をじっと見て、ぱっと行ってしまったイタリア人の子どもの行為は、異質なものへの率直な興味の表れにも見えた。下唇の内側は、茶褐色の肌の色とは全く異なる、鮮やかな美しいピンク色をしていた。

「世界」は、幼児ととてもかけ離れているように思うが、外国人の親を持つ子どもの存在は、最も身近な「世界」（への入り口）。子どもはとてもストレートに、大人は努力と工夫で向き合っていた。

日本人のほとんどいないこの町にも、ほかの町と同様、中国人は多かった。イタリア人からすれば、中国人はなじみ深い。それでも私は、滞在中、中国人と間違われることに抵抗があった。十把一からげにアジア人に見えるとわかっていても、また、私にもスペイン人とイタリア人は同じに見えても……。そこに日本では意識しないバイアスがあることを感じた。それは、私が日本人としてのアイデンティティーを持つからにほかならない。保育者も外国から来た親も、当然各自の国のアイデンティティーを持つ。それはそれで大事なことである。それゆえ、異なるアイデンティティーに近づこう、寛容であろうとする過程で払われる努力は、単純にオープンであること以上に価値のあることだと思う。―終わり―

注 nido：保育園の意味。〇～二歳児が対象。

研究

『幼稚園（をさなごのその）』の原著者 ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 3

ベルタの波乱の後半生

ディーター・レドナック（史学博士）
翻訳／ベルガー有希子（公立幼稚園教諭）
解説・写真提供／大戸美也子（幼児教育史研究者）

1　最初の結婚

「杖のマイヤー氏」は、娘に対していつも甘く、彼女たちの願いはすべてかなえてきた。しかし、娘たちの教育に関しては、学問をさせようとか、職業学校へ通わせようとはしなかった。当時の上流階級の女児たちは、音楽や文学の教養、そして、愛らしく振る舞うことを義務づけた「ブルジョアの教育プログラム」に満足しなければならなかった。つまりは、将来の夫となる男性に良いパートナーとして譲り渡すことができるための教育であったのである。また、娘の結婚相手を父親が決めることも少なくなかった。杖のマイヤー氏の娘たちも例外ではなかった。おそらく父親の一番のお気に入り娘であったベルタ（一八一八―一八六三）は、十六歳で父親の勧めで結婚することになった。結婚相手は、ハノーファー王妃のケンブリッジ公爵夫人の私設秘書をしていたフリードリッヒ・トラウン（以下、トラウン氏と表記）という優秀な男性であった。トラウン氏は博学で見栄えが良い上、ハノーファー宮殿で洗練された立ち居振る舞いを身につけており、愚直な義父には感嘆すべき人物であった。ベルタは父の望みを拒否することもできず、十四歳も年上の男性と結婚したのである。

ベルタの新婚生活はハノーファーで始まったが、一

Dieter Rednak（ディーター レドナック）
長年ハンブルグ市、社会福祉官庁に勤務。退職後、現在フリーライター

年もたたぬうちに二人はハンブルグへ戻ってきた。マイヤー氏が、順調に業績を伸ばしている自社の「参与」として、義理の息子トラウン氏に経営参加を求めたからである。トラウン氏は堪能な語学力を生かして、会社の渉外活動を一手に引き受けることになった。さらにマイヤー氏は自分の長男ハインリッヒ・アドルフに対して、トラウン氏の言動を見習うように助言した。トラウン氏は、マイヤー氏にはない博識と社交場の礼儀作法を身につけていたからである。

最初の数年間、ベルタはトラウン氏の理想通りの良き妻として、夫の言いつけを守り、一八四八年までに女児二人と男児四人の子どもをもうけた。マイヤー氏は、彼の所有するエルベ川に近いローテンブルグスオルトの住居をトラウン一家に貸し与え、週末にはこの館は、増え続けるマイヤー一族を集めて一家の憩いの場となった。

▲フリードリッヒ・トラウン氏

2　ヨハネス・ロンゲ[注1]との出会い

ベルタの同世代の友人にエミリエ・ブステンフェルドがいた。彼女の夫はマイヤー家とトラウン家の常連客の一人で、彼らは定期的に集まってはハンブルグの政治や経済の問題について意見交換をしてきた。ベルタとエミリエは、この夕べに同席はしていたが、彼女らの意見に耳を傾けるものはなく、ただ会合の準備をしただけだった。やがて二人は女性の伝統的な役割に不満を持つようになり、自分で何かをしたいし、自分の意見に耳を傾けてほしいと思うようになった。一歳年長のエミリエは、ベルタよりも政治的関心が強く、アマリエ・シーベキング夫人の設立した「貧困者と病人のための女性の会」の活動に参加していた。しかし、その会の差別意識や厳しい従順さを求めるあり方に違和感を覚え、やがてリベラルな方向を模索するようになっていった。

一八四四年当時、トリアではアーノルディ司教が、市の保管する『聖なるイエスの石』を崇拝するよう呼びかけ、その石が免罪の証しとなると公言した。これを聞いたブレスラウの教会を破門されたばかりのヨハネス・ロンゲ神父（以下、ロンゲと表記）は、非常に

Berger　有希子（ベルガーゆきこ）
ミュンヘン市教育スポーツ局所属。ロバート・ベーガー通り幼稚園勤務。ミュンヘン在住

心を痛めた。そして、この一連の騒動に対して「偽りの神の祝福であり、信心を逆手に取った茶番である」と断ずる質問状を公開したのである。

「カトリック教徒、プロテスタント教徒にかかわらず、階級による専制を阻止しよう！　ドイツ国民よ、今、免罪符販売を行っているのはトリアだけでありません！　至る所で、『お数珠』だの『ミサの執行』の名目で免罪集金が行われているのです！」

この質問状は民衆から強い支持を受け、ローマへの挑戦状あるいは宗教と政治上の抗議行動とみなされて、瞬く間にドイツ全土で多数の支持団体が結成され（一八四五年までに一七三団体）、「ドイツカトリック」と名乗った。

ロンゲは予想外の成功を収めて、「新ドイツナショナル教会」を広めるための全国的な講演旅行を展開し、後には『十九世紀の宗教改革者』と呼ばれるまでになった。これまでの宗教の形式を根本的に見直し、また男女が同等の投票権を持つようにした。

▲ヨハネス・ロンゲ氏

ロンゲが講演旅行でハンブルグを訪れることになり、講演会の支援者を募るニュースが伝わると、そのニュースはたちまちリベラルな実業家マイヤー氏の耳に入り、彼は支援を申し出た。マイヤー氏の肝いりでハンザ同盟市のコンサートホールを借りることができ、その後、ハンブルグ市にも新しいドイツカトリックグループが結成された。ベルタとエミリエは、ロンゲの発する福音を喜んで受け入れ、ことに聖職者自らが男女平等を訴えることに心から共鳴した。

一八四六年秋、ハンブルグにドイツカトリック会が結成されると、十二月にベルタは知り合いの婦人三十人を招いて「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体」を立ち上げた。そして、この婦人団体を中心にバザーや慈善の催しを行い、まとまった資金を作って、新しいカトリック会に神父一人を招き、礼拝や会合のための部屋を用意した。さらにこの婦人団体は、ドイツカトリック会への資金援助だけではなく、この会が宗教団体として公認され、カトリック会で執り行う結婚式や洗礼式なども行えるようにしようとした。しか

大戸美也子（おおとみやこ）
長年、保育者養成・現任保育者の再教育に従事。
近年は、幼稚園教育導入に関する日英米の比較研

し、市参事会や市民の中には慎重な審査を求める声もあり、公認されたのは一年半後の一八四八年三月のことである。ドイツ三月革命が両者の決断に影響を与えたものと思われる。

ドイツカトリック会と他の宗教団体は法的に同等に扱われるようになったので、婦人団体の当初の目標は達成されたのであるが、この婦人団体は新たに会員の意識や精神教育の向上をも目指すようになった。集会では、宗教や政治の議題だけではなく、女性の社会参加についても話し合われ、ドイツカトリック会や自由思想の仲間から講師を招いた。時にはベルタの友人であるエミリエ・ブステンフェルドも講演に立った。ドイツカトリック会と自由思想家たちとは、立場に違いはあったが、女性の社会的制約による知識不足を改善しようとする点では意見が一致していたのである。

3　女子大学設立運動の推進

ベルタと姉のアマリエは、幼い時からユダヤ人に友好的な家庭環境で育った。マイヤー家はこれまでユダヤ人と誤解されてきたが、教会に残る記録をたどれば、マイヤー家は間違いなくプロテスタントに所属する。それほど、ユダヤ人との交流が多かったということであろう。

ベルタの立ち上げた「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体」という名称は、明らかにユダヤ教の女性たちの入会を妨げるものであったので、一八四八年四月、『ソーシャル協会』という宗派を超えた福祉団体を新たに立ち上げたことについては、グロレ氏が本連載1で詳述している（本誌夏号参照）。また、このソーシャル協会の活動目標を幼稚園の創設としながらも、会員の間で活動目標をめぐって意見が分かれたことについても触れているので、ここではベルタが加担した女子大学設立運動について若干の補足をするにとどめたい。

ドイツカトリックの推進者ロンゲは、ブレスラウの神父時代にすでに女子の教育機関の設立構想を練っていた。ところが、これを具体化するだけの財源がなかった。ロンゲの計画を知ったベルタは、女子教育機関計画はシュレジア地方よりはハンザ都市ハンブルグで実現するほうがはるかによいとロンゲを説得した。そし

て、チューリッヒで学校経営をしていたF．フレーベルの甥、カール・フレーベルの助言を得て、ベルタは友人のエミリア・ブステンフェルドと共に女子大学設立のために奔走し、一八五〇年一月に開校にこぎつけた。

この学校は、大学とはいっても女性と女子学生に基本的な教養を与えるにとどまるものであった。当時の学校教育は宗教色が強かったが、この「大学」は、学費を納めることができるか、奨学金を受けることのできるすべての女性に門戸を開いたところに特色がある。開講科目は、「哲学」「教育学」「フランス語」「英語」「文学」「歴史」「地理学」「化学」「植物学」「物理学」であり、「教育学」が最重要科目であった。また百名の学生は、ハンブルグに新設された幼稚園での実習も課せられた。教育学者のアントレ・レー[注2]やアドルフ・ディスターベーグ[注3]等が講師として招かれ、カール・フレーベルが学長に就任し、ベルタとエミリアがその運営にあたった。

大学付設の寮には十名の学生が入寮していたが、そのほとんどが大学設立者の関係者で占められ、その一人に十七歳のベルタの妹マルガレーテがいた。学生募集は、主として口コミで、ドイツカトリック会や自由主義思想家などの知り合いを通して希望者を募った。また、大学運営の経費は、学費だけでは賄うことができなかったため、「学債」を発行して補った。[注4] しかし、これに関心を持つ人たちが少なかったので、実質的に「学債」を購入したのは、トラウン家とマイヤー家、そしてブステンフェルド家の三家であった。

4　ロンゲの国外逃亡とトラウン一家への波及

ロンゲは絶大の人気を博していたので、一八四八年にはフランクフルト国民会議の議員に選出された。しかし、ドイツカトリック会代表のロバート・ブルムが銃殺され、三月革命の敗色が濃くなってきた。そこでロンゲは「すべての独裁者に抵抗して武器を取ろう！」というプロイセン王あての檄文を公表したことから、彼は一転して「指名手配」の身に転じ、一八四九年八月には国外へ逃亡したのだった。

ベルタの夫トラウン氏は、ドイツカトリック会の考え方は「まともな政策」として、これに投資するつも

りで資金援助を続けてきた。しかしその一方で、ロンゲが次第に政治化し当初の目的から離れつつあることに、一抹の不安を感じてもいた。また、元聖職者のロンゲが女性に人気のあることも十分承知していたが、まさかそのことが自分に及ぶとは思いも寄らなかった。

妻のベルタはロンゲの影響を強く受け、自分から離れていくことを引き止めることが次第に難しくなっていった。妻はすっかり変わってしまい、自分の考えを堂々と夫に向かって述べ、年上の夫に従順ではなくなったのである。それでもトラウン氏は、ベルタのために、彼女の大きな計画を実現するために資金援助を惜しまなかった。

大学設立に献身してきたベルタであったが、大学開設直後の一八五〇年四月に、忽然とハンブルグから姿を消して友人たちを驚かせた。事情を知る数少ない人物である姉のエミリアは、「もうあなたのもとへは帰りません。私の視野は広がり、真の信仰生活や祝福された生活は、真実の愛の追求の中にこそある、と確信するに至りました……」と記したベルタの手紙を届けるために、ライプチッヒの見本市に出張中のトラウン氏を訪ねた。

最も簡単な解決策は、「離婚」であった。しかし、一八五〇年の法律では、双方の合意による離婚は法的に認められなかったので、一方の責任を証明する必要があった。不倫や配偶者のもとを一方的に去ることは離婚の理由にできたので、ベルタは離婚の責任を一身に背負うことにした。

自分が妻としての責任を放棄すれば世間の非難を浴びることは百も承知の上で、それでも彼女は自分の気持ちに正直であろうとした。トラウン氏は、抜き差しならぬ現実に向き合う羽目になったが、ベルタ欠席のまま離婚協議に臨むだけの度量を持っていた。ベルタが一歩踏み出したのは、単に身持ちが悪いということではなく、時代が生み出した狂信的な考えによるものであり、その考えは政治的なものか宗教的なものかの判断さえつきかねるものであった。残念ながらトラウン氏は、ハンブルグにドイツカトリック会が結成され、妻の入会を許したことで、離婚に至る事態を招いたと言えよう。

離婚の知らせを受けたロンゲは、指名手配中の身な

がらベルタを迎えにオランダへ向かった。もともと精神的に不安定なところのあるベルタは、ハンブルグからの逃亡中に極度のノイローゼに陥ったが、オランダで回復した。

一八五〇年十一月末、ハンブルグ裁判所で、トラウン氏とベルタの離婚は成立し、六人の子どもたちのうち、娘アガータとベルタ、そして末っ子の息子マックスは母親と一緒に暮らすことになり、あとの三人はハンブルグの父親のもとに残ることになった。正式な離婚の成立する一か月前の一八五〇年十月三十一日、ベルタはロンゲと共にロンドンへ渡った。この地で新しい宗教を広め、それを全世界に紹介しようという理想を抱いて。

注

1　ヨハネス・ロンゲ（一八一三―一八八七）は、シュレジア（現ポーランド領）の農家の八人兄弟の二男として誕生。ブレスラウ大学で神学を専攻し助任司祭になったが（一八四〇年）、教会の形式的な儀礼を痛烈に批判し、破門（一八四四年）。その後、ブレスラウを本拠として、人間の権利と寛容さを強調する「ドイツカトリック」運動をドイツ全土で展開するが、次第に政治色を強め、ロンドンに亡命（一八四九―一八六一年）。帰国後、フランクフルトで宗教改革連盟を立ち上げ、ウイーンで死去する。

2　アントレ・レー博士は、ハンブルグ市のユダヤ人を対象とする無償学校の校長を務めるなど、市の指導的な教育者。妻のヘンリエッテはハンブルグのソーシャル協会のメンバーで、フレーベルを招聘しての幼稚園教員養成講座の実現に貢献した。

3　アドルフ・ディスターベーグ博士は、子どもの好奇心や興味を教育的に豊かなものに高め、それによって自主独立の自立性を育もうとする自然主義の立場に立つ教育学者。フレーベルの友人であり盟友として、彼の仕事を支持し、広く紹介した。彼の娘ヘルミーネはフレーベルの教え子で、ベルリンを中心に活躍した。

4　大学の運営経費は、学生の授業料と寄宿生の高額の寮費だけでは賄い切れず、「学債」の購入や寄付に頼った。二年後、市からの寄付が停止すると、維持できなくなり閉校した。

報告

「子どもの自己肯定感」

お茶の水女子大学ECCELL第二回保育フォーラム（二〇一三年六月二十九日）から

安治陽子（大学教員）

ECCELL保育フォーラムとは

ECCELL（「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業）は、文部科学省特別経費によるお茶の水女子大学の教育研究プロジェクトである（リーダー：浜口順子教授）。本学の乳幼児教育にかかわる複数のリソースが協働し、子ども、学生、社会人が共に学び続け、成長を探究する場の創造を目指している。活動の柱の一つ、「社会人プログラム」（生活科学部特別設置科目）では、現職保育者をはじめ乳幼児保育に関心を持つ社会人の「学び直し、学び続けるニーズ」に応えるカリキュラム開発と、その教育・学習効果に関する研究を行っている。「保育フォーラム」は、このような学びのニーズにより広く応えるため、どなたでも参加できる公開講座とし、特に今日的な保育課題や幅広い保育関連分野の知見について学ぶ機会となるよう企画開催している。

「子どもの自己肯定感」をテーマに開催

第二回となる今回は、「子どもの自己肯定感」をテーマとして開催した。「自己肯定感」は、人間が心理的健康を保ちながら社会に適応して生きていくために、大変重要な役割を果たしている。乳幼児期においても、自己の発達とともにその重要性は増し、

安治陽子（あんじようこ）
お茶の水女子大学人間発達教育研究センター。

子どものＱＯＬ（Quality of Life：生活の質、生命の質）を構成する一つの重要な側面と考えられている。近年、日本の子どもの自己肯定感は諸外国に比べて低いという知見が提出されており、保育や教育の領域においてもさまざまな議論が行われている。

本フォーラム講演は、小児科学、小児神経学を専門とする榊原洋一氏（お茶の水女子大学大学院教授）が前半を、発達心理学の立場から筆者が後半を担当した。以下、内容を抜粋して報告する。

講演１「自己肯定感の発達」（榊原洋一）

私は小児科医で、発達障害を専門にしています。発達障害の中で自己肯定感が伸びない子どもたちがいるということで、もともと関心を持っていました。「自己肯定感」あるいは「自尊感情」は、英語ではいずれもSelf Esteemと言って、自分自身を評価するという意味です。心理学の研究では、自己肯定感が十分に持てない子どもは、大人になっていく過程でさまざまな困難に遭遇するリスクが高く、社会適応がうまくいかないと言われています。近年、日本の子どもの自己肯定感は世界で最も低いとの研究が出されてきており、保育の現場でも、子どもたちは大丈夫なのかという心配があると思います。

それでは、自己肯定感はどのように育っていくのでしょうか。いろいろな研究がありますが、二〇〇三年に出た『How Children Develop』という心理学の教科書には、自己肯定感を高める要因は、子どもの場合、大きく分けて二通りあると書かれています。大事なのが、competence in domains of importance つまり本人にとって重要な領域において自分ができる能力です。もう一つは、他者からの承認です。親や保育者から褒められることと、自分ができたことの両方が、自己肯定感のもとになるのです。

自己肯定感に影響を与える要因については、ジェンダーによって違うという研究もあります。また、子どもの生活圏の拡大に伴って要因が変化していくと思います。アメリカの心理学者、ブロンフェンブレナーが提唱したエコロジカルモデルでは、個人を

取り巻く重層的なシステムが発達に影響を与えると考えますが、子どもが育っていく過程の中でこれらのシステムとのつながりがより広く強くなり、自己肯定感のもとになる要因も変化していくと思います。

もう一つ重要なことは、乳幼児期は、主に他者からの承認によって自己肯定感が育まれていくけれども、思春期以降は自分で自己肯定感をコントロールする能力をつけていくことが大事になるということです。先程の教科書の最後には、十歳ぐらいになっても、自分自身の自己肯定感を他人の評価にあまりにも依存し過ぎていると、さまざまな精神的問題が起きると書いてあります。発達に伴い、他者の評価を取り込みながら、自分の中に内面化された自分自身の基準ができるようになります。小さい時の原始的な自己肯定感は大事ですが、生きていく世界が広がっていく中で、自分自身の内面的な軸をつくっていくことをもっと重視してよいと思います。

ここで、私の専門である発達障害の中の注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）、落ち着きのない子どものことをお話ししたいと思います。ＡＤＨＤの行動の特徴は二～三歳から顕在化します。物心がつくころから、走り回ったり順番が待てなかったりして、叱られたり注意されたりすることが多いのです。乳幼児期の自己肯定感は、褒められることが貯金されて育っていくので、二歳ぐらいからそういう行動の特徴があると、自己肯定感のもとがもらえないのです。

より脳科学的な考え方として、ＡＤＨＤの子どもは、集中する、自分自身を顧みるなど、行動をコントロールする実行機能（Executive Function）に課題があるとされています。自分自身を評価する能力、これはご褒美をもらうために我慢するという脳の働きと関係があると言われていますが、これも十分でないために、自己肯定感が十分に育たない。つまり、褒められる機会が少ない上に、自分自身を褒めることも少ない、二重にうまくいかないのです。

アメリカのデータでは、ＡＤＨＤがあると、その後に行為障害や反抗挑戦性障害、うつや不安障害などが起こるリスクが高まります。その背景に、自己

肯定感が育たないということがあるのです。これはＡＤＨＤという特殊な例ながら、私たちが社会に適応して社会人になっていく時に、自己肯定感が非常に重要なものであることを示していると思います。

最後に、日本の子どもの自己肯定感が低いということについて、二つの疑問をお示しします。一つは、測定に用いた尺度の妥当性の問題です。二〇〇五年の『サイエンス』誌に掲載された論文で、世界四十九か国の国民性について、ビッグ・ファイブという五領域のパーソナリティー（性格・人格）の組み合わせで調査した研究があります。日本は、「神経質傾向」が高いほうからトップ5に入っており、「外交性」は下から二つ目、「開放性」（低いと保守的）は一番低いとされています。これは良い悪いではなく、歴史や文化の中で日本の大人が身につけてきた一つの人格なのです。「自己肯定感」を測定する質問紙では、外交性が高くて開放的な子どもは自己肯定感が高くなるように項目が作られています。欧米の文化を反映しているのだと思います。子どもは大人を見て育つわけですから、日本の子どもの自己肯定感が低いという結果の背景には、そういう文化的な差異があるのではないかと思うのです。もう一つの疑問は、本当に日本だけが低いのかという点です。この二点を考えてみなければいけないと思います。

子どもの自己肯定感を高めることは非常に重要です。しかし、日本の子どもは自己肯定感が低い、このままいくとおかしくなってしまうのではないか、とびくびくしながら、子どもの自己肯定感を必死に上げようとする必要はないのではないかと思っています。これまでの調査結果には測り方が大きく影響しており、日本だけ低いわけでもないようにも思うからです。昨年度まで文科省から研究費を頂いて、安治さんにも手伝ってもらって、アジアの子どものＱＯＬの調査を行っていました。その結果について報告してもらいます。

講演2「日本の子どもの自己肯定感」（安治陽子）

私は発達心理学が専門で、保育の現場に入らせて

いただくこともあります。臨床心理士としても子どもの発達の相談や親御さんたちとのいろいろなかかわりを持たせていただいています。ですから、今回の調査のデータについても、実際の親子の姿や保育の様子を頭に浮かべながらその意味を考えています。

まず、アジア四か国の国際比較研究のデータから、日本の子どもの自己肯定感について考えてみたいと思います。日本、ベトナム、タイ、中国で就学前児（五～六歳）を持つ養育者に質問紙調査を実施し、約千七百名の協力を得ました。多様な生育・養育環境が親子のＱＯＬと子どもの発達にどのような影響を与えているのかを調べる研究で、子どもの自己肯定感は、ＱＯＬを構成する一つの側面として、心身の健康や対人関係と共に取り上げられています。子どものＱＯＬの測定には、Kiddy-KINDLという尺度の養育者回答版を使用しました。

分析の結果、日本の就学前児の「自己肯定感（自尊感情）」は、中国やベトナムよりも統計的に有意に低いものの、タイとは差が見られないという結果でした。先程の榊原先生の「日本だけが低いのか」という問いに対しては、相対的に低い位置にあるけれども、日本だけが低いのではない、と言えます。一方で、ＱＯＬを構成する他の側面（身体的健康、情緒的健康、園生活への適応、友人関係における適応、家族関係における適応）については、日本はそのほとんどが四か国で最も高いという結果でした。日本の幼児は心身の健康や社会的適応面のＱＯＬが高く、健康で適応的な発達をしていることが示されたのです。

自己肯定感の発達には、ＡＤＨＤなど行動上の問題が深く絡んでいるというお話もありました。情緒的な問題や行為の問題、多動・不注意、友人関係の問題など、社会的な適応にかかわる行動問題についても分析してみましたが、日本はどの国よりも行動発達上の困難性が低いという結果でした。日本の幼児は、行動面でも非常に安定した発達をしていると言えます。

このように、日本の幼児は健康で、社会的にも行

動面でも適応的に育っています。「自己肯定感」は、心身の健康や社会適応と深く関連していると言われていますので、「自己肯定感」だけが他国に比べて相対的に低いという結果については、やはり先程榊原先生がおっしゃったような測定上の問題もあるのではないかと考えています。

一般に、子どものＱＯＬは親のＱＯＬと関連していると言われています。それでは日本の親のＱＯＬはどのような状態にあるのでしょうか。私たちのデータでは、ＱＯＬのすべての側面において、日本の親は四か国で最低というショッキングな結果でした。育児感情についても、日本の親たちは子育てに楽しさや充実感、自信を持てなくなっています。夫婦で子育てについて話し合いや助け合いをしているという認識も、日本は四か国で最低でした。日本の親は、心理的社会的に非常に苦しい状態にあるということが今回のデータからも見えてきました。このような親の危機的な状況について、その背景や支援のあり方を具体的に考えていく必要があるのではないかと思います。

親のＱＯＬがこれだけ低い中で、就学前の日本の子どものＱＯＬがおおむね高い状態にあるのは、保育の果たしている役割が大きいということでもあると考えています。日本の保育は、子どもを中心に、一人ひとりの子どもを尊重した丁寧な保育実践を積み重ねてきました。日々の保育の中で、どんな言葉を、どのタイミングで、どう掛けるかということも深く探究されていますし、環境構成・環境調整も、子どもが見通しを持って行動し、自ら考え工夫して「できた」という体験を積むことにつながっています。発達支援の領域で「機能分析」とか「視覚的構造化」と言われるものも、要は子どもを尊重することなのです。子どもの思いをくみ、子どもの育ちを理解し見通して、今必要なことを思慮深く準備する、そうして子どもの育ちを尊重する日々のかかわりが、子どもを大事にするということであり、子ども自身が自分を大事にして、自己を肯定するところにつながっていくのではないかと思います。

「幼稚園から小学校へ
―幼稚園と小学校幼年級の真の連結―」
―第二十三巻第四号（一九二三年四月）より―

春、幼稚園や保育所を巣立ち、小学校一年生になる子どもたち。期待に胸をふくらませている。この節目の時を乗り越え、成長を感じ、自信に満ちた生活を送ってほしいと、保育に携わった誰もが願う。しかし、幼稚園から小学校へのつながり―「幼小連携」が教育界で問われ続けているということは、このことがいかに難しい課題かということであろう。

倉橋惣三も『幼児の教育』一九二三（大正十二）年第四号で語っている。「幼稚園と小学校は決して離れて居るものでない……」と記し、米国での試みを紹介しながら、その中心にいるのは子どもたちであり、教師同士は相手に求めるだけでなく、子どもの発達、特性を踏まえた連結のあり方、生活のし方をつなぐことの大切さをもっと考えてほしいとしている。そしてさかのぼると、『幼児の教育』の前身『婦人と子ども』の一九一一（明治四十四）年第七号にも「幼稚園と小学校との課業上の連絡」（佐々木吉三郎）がある。そのころから、その時代その時代で問われ考え続けられている幼稚園と小学校のつながり。この課題はいつまでも続くのだろうか。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園　吉岡晶子）

幼稚園から小学校へ ― 幼稚園と小学校幼年級の真の連結 ―

（一九二三（大正十二）年　第二十三巻第四号）　倉橋惣三

一、幼稚園と小学校との関係

小学校と幼稚園との関係と云うことに就て色々の問題がある。しかも、其れが今日必ずしも理想的に滑かに行って居ない問題でありますが、それに就て事実上の解決を考える前に、先ず気のつくことは、今日の我が国で行れて居るような小学校と幼稚園の関係に於きましては、之を材料として幼稚園と小学校との関係を考えて行くと云うことは余程困難であります。従って小学校の方からは幼稚園を責めると云うようなことになり易いのでありますが、其結果として、幼稚園の方の人々は幼稚園の教育は小学校の教育に対して直接の準備をして居るものでないと云う様なことを言って見たりするのであります。私共も時にはそう云う言葉を使うこともある。幼稚園教育は児童生活の一般的の教育をして居るだけのことであって、小学校の予備教育として小学校の準備教育としてして居るものでないと云うのです。其の意味は、我々の幼稚園は今日あるがままの小学校教育法に這入るのに都合の宜いように、誂え向きに、注文に応じて教育をして行く所じゃないと云う斯う云う意味なのです。併し、特にそんなことを言い出す必要のない時、もっと平たく考えて見ますならば、幼稚園の時期から小学校の時期に繋って行くと云うことは当然のことであり、又幼稚園を出た子供は悉く小学校に這入ると云うことも明瞭なことでありますから、幼稚園の教育は小学校の教育に無関係、無頓著だというのは、甚だ奇妙な

ことになるのです。矢張有らゆる意味に於て幼稚園と云うものは小学教育の基礎となり準備となると云うことは極めて当然なことであります。然るに、往々議論が起るというのは、詰り幼稚園と小学校の関係を余りに区別して居ると云う所から起って来る結果でありましょう。実際問題として、子供の個人の発達から言っても、或は子供の教育全体から見通して云いましても、幼稚園と小学校は決して離れて居るものでないのでありますが、併しそれを色々のことで離して居る為に、斯う云う風な問題が起って来るに過ぎないのです。（中略）

四、初年級の革新

教育の方法に就きましては、シカゴの方もコロンビヤの方も、所謂「プロヂエリ（ク）トメソッド」を執って居るのでありますからして、従来の学習的方法でなく暗記的方法でなく、従って幼稚園に於ける方法と、小学校の一二年に於ける教え方とその態度としては違って来ない。勿論四歳の子供のプロヂェクトと七歳の子供のプロヂェクトは其子供自身の能力の発達に依ってプロヂェクトの仕方が、違って参ります。内容的には幼稚園と小学校とは勿論程度が違ったものになって来ますけれども、併し其取扱方としては、矢張或る一つの目的を立てて其目的に向って問題を解決して行く。或は単に抽象的な問題を解決するばかりでなく、具体的解決、即ち製作と云うものをさせて行くと云うようなことに於ては、幼稚園と小学校と云うものは少しも違わないのであります。（中略）

従って抽象的の自負心としては、自分は幼稚園から小学校の生徒になったと云う多少の緊張は起るか知れませぬが、併ながら、我が国に於けるが如く、其の生活の態度それ自身が変って

来る為に、今では自分の興味を主として、自分の好き好みでやって居った生活から、先生を主にした受身の生活に変って来るとか、或は個人的な自由な生活から集団として纏(まと)められた束縛せられた生活をしなくちゃならぬようになって来るとか云うような、本質的な、殊に急劇な変化はないのであります。是は甚だ注意すべき問題じゃないかと思います。詰り我々の小学校のやり方では小学校へ来たと云う自負心から来る緊張よりも、其小学校に於ける生活の変り方から来る所の緊張と云うものが、主になって居る。所が此(この)亜米利加流の此やり方で云いますならば、小学校へ入った為に何も生活それ自身を変えて一層鉢巻をしなければならぬ、一層襷(たすき)を固くしなければならぬと云う意味の無理な緊張はない。唯(ただ)自分は兄さんになった、弟と云うものが下に出来て兄さんになったと云うような人間的自負心から来る所の緊張が起るだけです。少くとも内的緊張は起りましょうが、外的の緊張は起すと云うことはないのであります。

斯う云う風な形に於て小学校の幼学年級が段々幼稚園と云うものと其関係が密接になって参ります。今日我国では、幼稚園から来たものは小学校に於ける学習態度の準備が出来て居ないと云うので非難されたりして居る。詰り、受動的注意が足りないとか、集団的におとなしくして居ることが足りないとか言って非難されたりする。併し其小学校の幼年級に於ける生活そのものが、其学習的態度と云うものそのものが変って仕舞って、矢張幼稚園でやって居ると同じようなプロヂェクトの生活、自分の目的を自分で解決して行く、或は具体的の製作の生活が本体になって来れば、予めそういう生活態度を幼稚園でならされて来たものは、即ち其の小学校の生活に準備されて居るということになる。此処に始めて、幼稚園と小学校との本当の連結がつく訳でありますまいか。

『幼児の教育』平成二十五年 総目録

◇春号

カリキュラム不要論　浜口順子
問い直そう、保育の中のあたりまえのこと9 カリキュラムはだれが作る？
・インタビュー　戸田雅美氏
・保育者の「表現」としての計画　矢萩恭子
・だから保育は面白い！　新井理香
・おいしいカリキュラムのつくり方　辰巳　豊
子どもが育つ場所を訪ねて
中瀬幼稚園　伊集院理子
私の保育ノートから
・子どもを信じて　香田成美
・児童館の親子と共に　江村綾野
子どもたちの「現在」と持続する「現在」
孤立した「現在」を考える①　本田和子
食べる・つながる・育つ
保育園給食から(後)―親たちの学び　兼田祐子
編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑤
生活と知を結ぶ芸術性　浜口順子
講演「これからを生きる子どもたちへ」
～津守眞氏からのメッセージ
イタリア保育〝おもいきって〟参観記(2)
「園への両親の参加」　金澤妙子
松野クララ記念歴史に学ぶ会 第一回
講演会報告　宮里暁美
幼児の教育一一〇年の散策
周郷 博 講演「現代の幼児教育」

◇夏号

「いいこ」と「よいこ」　浜口順子
問い直そう10 「規範意識」って何だろう？
・座談会　友定啓子氏・中村万紀子氏・大森洋子氏・宮里暁美・浜口順子
・冒険遊び場の規範意識　宮里和則
・《解説》規範意識に至る過程　内藤俊史
子どもが育つ場所を訪ねて
那覇市立金城幼稚園　髙橋陽子
私の保育ノートから
・チャボが育ててくれました　吉岡晶子
子どもたちの「現在」を考える②
「いま子どもである人」にとっての「少子化」とは？　本田和子
食べる・つながる・育つ
子どもにおやつを届ける　伊東奈那
編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑥
昭和初期の「よいこども」観の変化　浜口順子
「実践を通して表現の源を考える」
刑部育子・ハーフミラーグループ・伊集院理子・中澤智子
イタリア保育〝おもいきって〟参観記(3)
未就園児と家族の集う「ルド テカ」　金澤妙子
『幼稚園』の原著者ベルタ・ロンゲのルーツをたどる1　ベルタと幼稚園教育との出会い　インゲ・グロレ・ベルガー有希子・大戸美也子

◇秋号

混とんと整然と　浜口順子
問い直そう11 「感性の豊かさを育てる」とは？
・インタビュー　和久洋三氏
・感性の豊かさとは―子どもたちとのふれ合いの中で―　槙谷厚子
・「感性」の意味 平田流解釈　平田智久
・みんな踊って、みんないい　中野優子
子どもが育つ場所を訪ねて
岩屋保育園　宮里暁美
私の保育ノートから
・大学の中で育つ小さな子どもたち　濱崎由紀子
子どもたちの「現在」を考える③
少子化のメリット　本田和子
食べる・つながる・育つ
「おいしい、うれしい、たのしい」でつながる子どもたち　西野博之
編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑦
「犬」を主題にした観察絵本　浜口順子
イタリア保育〝おもいきって〟参観記(4)
三大ラボラトーリオ　金澤妙子
ベルタ・ロンゲのルーツをたどる2
企業家マイヤー家の人々
ディーター・レドナック・ベルガー有希子・大戸美也子
「三歳未満児の保育を実践事例から考える」遠山洋一先生の講演とバズセッション　菊地知子
幼児の教育一一〇年の散策
「笑う」「笑い」「ユーモア」

◇冬号

特集テーマ「準備期」に思う　浜口順子
問い直そう12 幼児期は「準備期」？
・インタビュー　矢野智司氏
・今が、一番　松木正子
・人生の土台
～六歳の春に向かって～　向山陽子
・「たいしたもんやなぁ」　柳瀬洋美
子どもが育つ場所を訪ねて
東二番丁幼稚園　上坂元絵里
私の保育ノートから
・「乗り越えよう！」その気持ちを支える　掛 志穂
子どもたちの「現在」を考える④
「いま保育者である人」が「いま子どもである人」に対する不可避の「責務」とは？　本田和子
食べる・つながる・育つ
食べて育つということ　松岡文子
編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑧
「広がる世界、伸びる日本」というメッセージ　浜口順子
イタリア保育〝おもいきって〟参観記(5)
外国人の親を持つ子どもをめぐって　金澤妙子
ベルタ・ロンゲのルーツをたどる3
ベルタの波乱の後半生
ディーター・レドナック・ベルガー有希子・大戸美也子
「子どもの自己肯定感」　安治陽子
幼児の教育一一〇年の散策
「幼稚園から小学校へ―幼稚園と小学校幼年級の真の連結―」

子ども学のひろば

お便り POST

◇読者から◇

当誌のキーワードは「確かさ」ではないかと思いました。

前面には出さないにしても、子ども理解、子どもと政治制度、子どもと社会、子どもと歴史、子どもと文化、子どもと世界等々、子どもを軸に季刊ごとに確かな「つっこみ」が提供されるとありがたいなと思います。これまで当誌が得意だった子どもの理解などのほかに、情報そのものに留まらず、その裏にある現実の問題が時空間の中で明らかになると、保育と社会の事実又は様相が、重層的に浮き彫りになるのではないでしょうか。

（茨城の愛読者より）

ネット配信記事「パパ予備軍に捧ぐ育児講座」

http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02800_01

比較的若くして（26歳、28歳）結婚し、その後それぞれ11年、7年、と年月を経てからわが子を授かった男性医師二人の対談記事。

「本講座では、『仕事も育児もデキる』ふたりが育児参加の効用や時間づくりの工夫、医師の『ワーク・ライフ・バランス』の問題までを語り尽くす。男の子育ては、思いのほかワクワクする楽しいことなのかも……。」（医学書院／週間医学界新聞 2008年10月6日号掲載記事冒頭より）

日本保育学会第67回大会のお知らせ「ヒトから人へ、人からヒトへ」

会期：2014年5月17日（土）、18日（日）
開催地：大阪総合保育大学、大阪城南女子短期大学

子どもを取り巻く環境・子育ての環境が大きく変容した今、保育の制度もまた大きく変わろうとしています。

第67回では、発達と同時に子どもをめぐるつながりをあらわす言葉として「ヒトから人へ、人からヒトへ」を掲げ、子どもは人間であることを軸に、大人と子ども、また地域・社会への適応といった、人との関わり方を皆様と考えあう場としたいと思います。（第67回大会HPより）

http://www.hoiku-67taikai.info/

本の紹介『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』平田オリザ　講談社現代新書 2012年

原因と結果を一直線に結びつけない考え方を一般に「複雑系」と呼び、コミュニケーションの問題を「複雑系」で考えるのが筆者の言う「コミュニケーションデザイン」という視点、新しい学問領域である。例えば、これからの時代に必要なもう一つの（人々を力強く引っ張っていく能力とは別の）リーダーシップについて「弱者のコンテクストを理解する能力」であるとして、次のように言う。「社会的弱者と言語的弱者は、ほぼ等しい。私は、自分が担当する学生たちには、論理的に喋る能力を身につけるよりも、論理的に喋れない立場の人びとの気持ちをくみ取れる人間になってもらいたいと願っている。」

同感であるし、自分自身そういう者であれたらと思う。（KT）

エピローグ

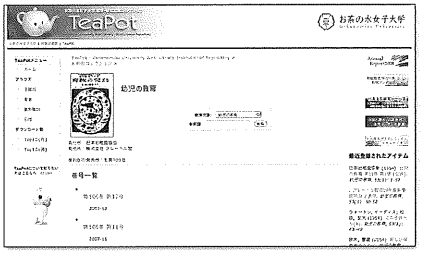
「シェーナウの想い～自然エネルギー社会を子どもたちへ」という映画を見た。ドイツ南西部の小さな町の住民たちが、自分たちの力で電力供給会社をつくったドキュメンタリーである。たくさんの困難の中、彼らがあまで頑張れたのは、ある種の「心地よさ」ゆえかと、ふと思った。やるがよいと思ったことをし続けるためにアイデアを出し合い、やれることをやれる形で実行していく。その「心地よさ」が、人々の行動や想いを根底で支えたのではないか、と。

世に、子を育ててこなかった文化・社会は無い。邦題になぞり「世界の想い～生きやすい社会を子どもたちへ」とでもいうべき願いを、すでに共通に持ち得ている者同士、心地よさに支えられて生を慈しむような働きを、小さくとも私たちも重ねていけたら、と思う。(KT)

幼児の教育 バックナンバーをWEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索



http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。
なお、自由投稿、「ひろば」への情報などもお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告　幼児の教育 春号 2014年3月刊行予定

新企画、新連載がスタート！　充実した内容でお届けします。

新　特　集　保育から世界が見えてくる
－「安全」を考える －　木下勇氏・當銀玲子氏・中島千恵氏

新　連　載　保育エッセイ　榎沢良彦氏

新コーナー　古典を読む 第1回　皆川美恵子氏

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 冬号 第113巻 第1号

平成26年1月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6604(編集)
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／750円(本体715円)

©日本幼稚園協会 2014 Printed in Japan

編集委員／上坂元絵里
菊地知子
髙橋陽子
宮里暁美
編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

好評発売中

保育所　発達段階に着目した
12か月の指導計画

民秋 言／著

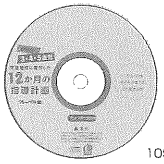
年齢に応じ、個から集団までを見据えた内容

『発達過程に着目した指導計画作成のすべて』の実用版。保育にすぐに役立つ毎月の指導計画案と保育のポイントを掲載。 26×21cm　336ページ　定価各3,150円（税込）

保育書
0・1・2歳児
発達過程に着目した
12か月の指導計画

10924

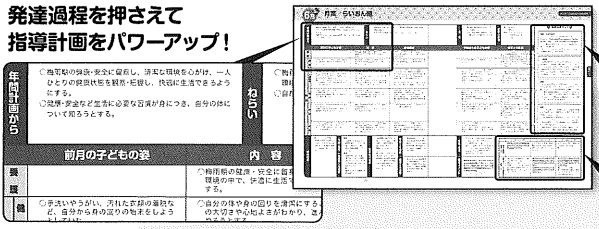
保育書
3・4・5歳児
発達過程に着目した
12か月の指導計画



10925

すべての指導計画案の文例を掲載したCD-ROM付き！ ※for Windows　Windows7対応

発達過程を押さえて指導計画をパワーアップ！



保育のポイント

指導計画案の養護と教育のポイントをていねいに説明。保育のヒントが満載！

養護（生命の保持）
一人ひとりの子どもが快適に生活できるようにするには、平常の健康状態や発育および発達状況などの背景に照らし、日常の生活の中から健康観察により、異変を迅速やかに見つけ出し、適切に対応することが必要です。
また、子どもが自己信の育ちを感じられるような環境であることも大切です。

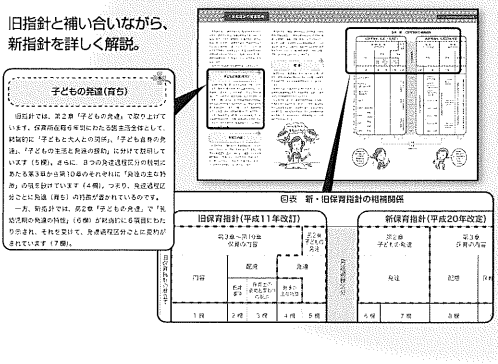
発達過程表の抜粋

指導計画表の作成にかかわる発達過程表の該当部分を抜粋。

		vi　おおむね4歳
環境（う）	自然の事象	自然などの身近な事象に関心をもち、遊びや生活に取り入れようとする。

新・旧指針の相補関係から保育を把握！

旧指針と補い合いながら、新指針を詳しく解説。



図表　新・旧保育指針の相補関係

新・旧指針の「内容」をまとめたオリジナル発達過程表！

「発達（育ち）の連続性」と「発達過程区分」の視点で、新・旧指針の「内容」を並べて作ったオリジナル発達過程表。指導計画の作成に役立つ！

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業推進部（03）5395-6608にお問い合わせください。

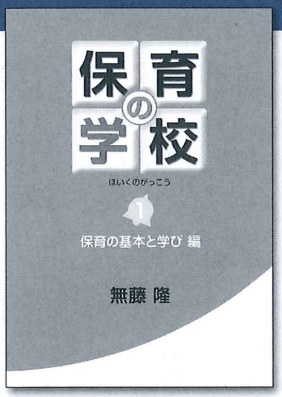
幼児の教育　第一一三巻　第一号　平成二十六年一月一日発行

好評発売中

保育の学校

無藤 隆／著　21×15cm　136ページ　定価各1,365円（税込）

平易な言葉でわかりやすく。
保育をふりかえり、考え、
深めていくための16講義。



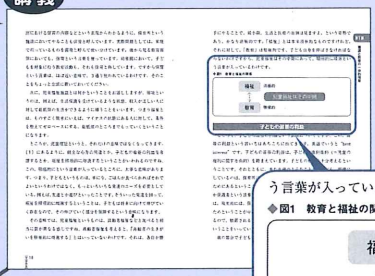
保育の基本と学び 編
10931
養護と教育の一体的保育、教育課程・保育課程と指導計画や、数・図形、文字などについての講義。

5領域 編
10932
「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の５領域と、体験の多様性と関連性についての講義。

5つの今日的課題 編
10933
子育て支援、評価、小学校との連携、特別支援、食育、保育の５つの今日的課題についての講義。

予習

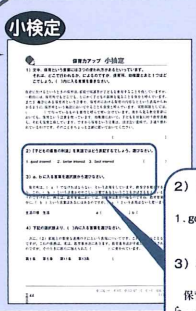
講義



●Point●
保育を考えるために、16のテーマを設定。すべての講義が
予習→講義→まとめ→小検定
で構成されているので、園内研修にも最適です！

まとめ

小検定



う言葉が入っているわけです。

◆図1　教育と福祉の関係

福祉　消極的
↕　児童福祉はその中間
教育　積極的

子どもの最善の利益

ところで、子どもの最善の利益という表現についてですが、この、最

▲図解でわかりやすく！

2）「子どもの最善の利益」を英語ではどう表記するでしょう。選びなさい。

1．good interest　2．better interest　3．best interest　（

3）a、bに入る言葉を選択肢から選びなさい。

保育所は、（ a ）でなければならない、という表現をしています。教育学を勉強すら、この、（ b ）という言葉がややこしい言葉であるということを学ばざるをえないうのですけれど、例えば、教育要領においては、幼稚園は教育の場なのですね。教育要中に、（ b ）という言葉はあるにはあるのですが、（ a ）という表現はないと思いま

◀ポイントを再確認！

電子版もあります！

定価　七五〇円（本体七一五円）☆

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業推進部（03）5395-6608にお問い合わせください。